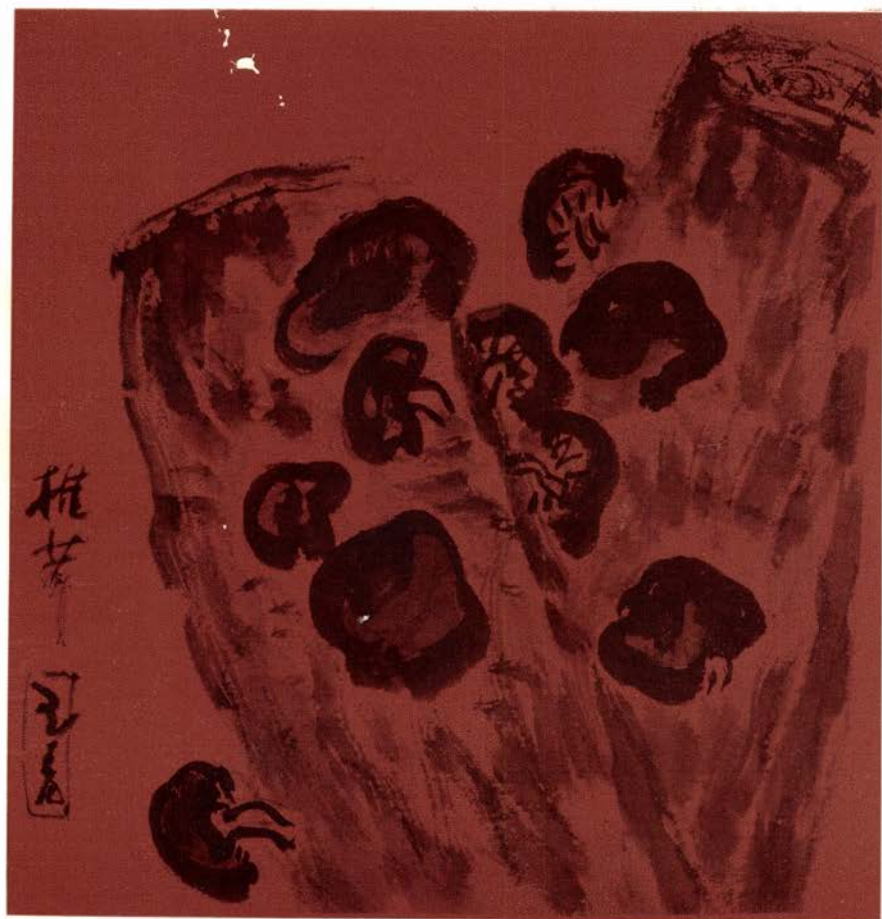


川柳塔

昭和四十年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十年九月二十五日 印刷
昭和五十年十月一日 發行(毎月一日發行)
創刊大正十三年通卷五九三號



日川協加盟

No. 593

51年度二賞発表

十月号



51年度二賞発表句会と同人総会 —— 川柳塔社主催

日 時 昭和51年10月3日(日) 午後1時開場
会 場 大阪府中小企業文化会館(3階33・34号室)

天王寺区上汐町5丁目25番地(地下鉄・谷町
九丁目下車南へ300m) 電話 771・4096番

▼同人総会は午後2時～3時30分(総会の決議は出席者によって採決させていただきます。式次第第一司会・西尾榮一開会の辞・川村好郎一挨拶と経過報告・中島生々庵一會計報告と質疑応答・若本多久志一閉会の辞・菊沢小松園。

▼懇親宴は同会場で4時～5時・会費1,500円。どなたでもご参加ください。
申込み締切9月30日・居人まで。

▼二賞発表句会は5時30分から

二賞受賞者表彰

兼 題	「拍手」	菊 沢 小 松 園 選
	「抜 群」	川 村 好 郎 選
	「本 社」	若 本 多 久 志 選
	「祝 電」	西 尾 榮 一 選
席 題	二 題 (選者と題は当日発表)	
会 費	5 0 0 円	

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ!

豚 焼 饅 売
焼 餃 子
豚まんの王様、やき豚入り
又 焼 饅



大 阪・なんば



TEL (641) 0551-2



<出張店> なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
京阪デパート/堂島地下センター/中之島サン・ストア/なんば新川店/奈良近鉄百貨店

主観と客観

法衣涼しく透けても盆経僧の汗
セツトして老妻何となく静かな目
褪せた浴衣老妻にわびし秋の色
夏の演技風鈴も鳴らず娘の昼寝
炎天下あわれみみずに極まれり

中島生々庵

ことしの夏は暑さにうだり乍らの日暮しが続いた。平素は秒読みの私にとって、うけとり方によっては亦愉しからずやでもあった。書架に読みさしの本を探す。沢木興道全集第二巻に「要再読」とサインのある頁を開く。『……とにかく評論家とか著述業というものは自分のことは書かずに人のことだけはじつによくわかるんだ。わたしは叱られると猫をよくどついてやったが、猫でもこれはわかるとみえてわたしがゆくと猫のやつすぐに逃げ

よった。こちらが憎んでいると向うでも憎んでいる。西田幾太郎博士の文章に「主観を客観に見る」ということがあるが、ほんとうの自分というものはどうしたら見られるか。更にどうしたら本当の客観化というものが見られるかと工夫してみる。本当の主観がみえた時は本当の客観がみえるのである。又本当の客観が見える時は本当の主観がみえたのである。』とある。作句態度にも自分の顔を鏡に写し乍らということになるのだろうか。

川柳塔十月号

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

(路郎)

私の句

子の爪をパチリパチリと夜がまろし

森井 菁居

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

主観と客観

中島生々庵 (1)

津軽の前句談義

工藤 甲吉 (2)

俳風柳多留廿五篇研究

(十二)

若本多久志選 (4)

清 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫

川柳塔 (同人作品)

川村好郎選 (32)

水煙抄

東野 大八 (22)

麻生路郎物語

(22)

菊沢小松園 (25)

秀句鑑賞 (同人吟)
(水煙抄)

水粉 千翁 (39)

近作

諸家 (53)

百人一首と川柳 (28)

富士野 鞍馬 (40)

愛染帖

正本水客選 (42)

51年度路郎賞・川柳塔賞発表

津軽の前句談義

工藤 甲吉

『西行の桜を見ては春の日の暮るを惜み宗祇の清水を掬んては夏の日のあつきを忘れ芭蕉の野分を聞ては秋の日のあわれを知り川柳の千鳥を聞ては冬の日の寒さをいとふ。去ればいつの頃よりか出来にけん前句てふもの世に痛く行はれ人の甞となんなりける 我が弘府なる真砂の翁は身は商人なれと一以下略』
以上は『弘府』すなわち津軽文化の発祥の地・弘前で文久三年(一八六三)俳人の鶴川孤川が編集した前句の書『渡舟』の序文の一節であるが、万治元年(一六五八)に河内、和泉地方から興ったといわれる前句は我が津軽でも、痛く行はれ、特に享保・明治末の頃が最も盛んだったといわれている。

ところで、この前句付の点者の一人に青森の落合九三子という義人がいた。天明三年といえは八飢饉。津軽藩内各地では百姓一撥が次々勃発した。青森町もまた七月の大火に加えて米価は日まじに上がるが、藩は窮民救済を全然考えない。そこで憤激の窮民数千人が徒党を組み富豪の米倉を一挙に襲った。

さて九三子はインテリ。文筆にたけているところから藩への歎願書を起草した主謀者の

「旅人」以後の麻生路郎作品……………(37)

一分間の柳論……………

篠山デカンシヨ祭吟行……………

書評……………

故森田茗人君を悼む……………

加藤貞山・八木千代

初歩教室……………

大萬川柳「幽霊」……………

柳界展望……………

雅号ぶつちやげばなし……………

本社九月句会……………

各地柳壇(佳句地10選)……………

「新刊」……………

一路集「選手」……………

「暴力追放」……………

編集後記……………

傍島 静馬……………(31)

渡辺 暁堂……………(30)

室谷 徹舟……………(61)

鬼遊・酔々……………(44)

橋高 薫風……………(46)

河村 日滿……………(48)

本田 恵二朗……………(52)

川村 好郎選……………(54)

小幡 里風……………(67)

(庸佑・整理)……………(58)

野村太茂津選……………(63)

松本忠三選……………(50)

西岡洛醉選……………(50)

恒松町紅選……………(51)

(一三夫・葉子)……………(69)

座右の句

忠孝という文字ありき 墓碑も朽ち

私の句

苔青く梵の一字があれば足る

香川 酔々

(好郎)

一人と見なされ他の首魁四十五人と共に直ちに弘前の牢屋にぶち込まれたのであった。

ときに九三子齡七十余。余命幾何もない自分とは別として若い者たちの生命を救うべく、罪を一身に引受け、全人の放免を願ひ出た。そして、弘前評定所に於ける尋問では何ら述べることなく、筆硯を願ひ、ただ

老子(喪) 派のふたり万年酔

何の奇もなし變哲もなし

右の一句を奉ったところ、はたせるかなこれが必要の者の胸を打ち、九三子一人だけを牢に留め、他を全員放免したという。

かくして九三子は天明三年十二月十日そのまま牢死したが、調べてみたら翁はもともと伊勢の人。正徳年間の生まれで屋号を、『伊勢屋』といい名は落合仙右衛門。先代からの酒造業と船問屋を営み町年寄もした。晩年商売をやめてからは寺小屋を開き、子弟教育に努め、一方、風雅をたしなみ俳諧ではその名を他国にまで知られたという御仁である。

なお最後に回ったが『老子派の』の句の意味はホラ吹きどもが玄牝の門をくぐる鍵について論じ合ったところ果てしなく続き、気がついた時には酒がすでに酔になつてた。これと同じく青森の町民もいろいろ相談しているう群衆の勢いで思わぬ騒動に発展してしまつたのだから、今になって何故と言われても答えるすべがない、といったところ。とにかく九三子翁してやったりではある。



若本多久志選

竹原市 山内 静水

ウインクに射られてからの男坂
七人へ斬り込むラッパ妻が吹く
砕け散る波に生ざま教えられ
ひそと住む善人にある祈り
幸福な小石土鈴の中に住み
絶対絶命妻の機嫌を言うとれず

八尾市 大路 美幸

善人がひしめく細い細い路地
静かいの果てしばらくは闇に座す
夕焼けの駅 秋風の私語を聞く
いわし雲 馬と軍歌は遠くなり
子を思ふ一途が絵馬にうづくまる
言い負けて少年冷たい水を飲む

八尾市 高橋 夕花

母のかたみ 母の匂いの中で泣く
水甕に憂いを溜める日もありぬ
黄昏れてやさしくなりぬ花の芯

祈り終えた夫の顔は澄んでいた
惜しみなく食べて瘦せたし秋になる
星一つ抱いて女は満ちたりぬ

青森市 工藤 甲吉

ロッキード今日もきりきり奥歯鳴る
天を天と思わず天に罰せられ
過去はむくろよ喜びも悲しみも
家中が心寄せ合い西瓜割る
胡瓜もみ今やこの世に妻は居ず

竹原市 三宅 不朽

親子という静かさにいる子の寝顔
かのひとが住む町 険とず車窓
小走りに女火を抱き風の中
そのままで散りたいだろうカンナの朱
火を点し消しては点し旅ひとり

水見市 関 美子

朽ち葉焼くかつておごりし者たちよ
ブラッシングふけは散り行く老兵か

虹彩の周囲に愛のキーワード
塾の灯に吸われ風の子見当らず
温みあるたまご受験の娘にそえる

倉敷市

水粉千翁

励ましの重き弁当箱を提げ
打ち明けて月の丸さをたしかめる
一と筋の道に遙かなものを追い
ふり向いて出会う笑顔をあたためる
手をつなぐ心の広さわかち合い

大阪市

不二田 一三夫

林檎 げらげら笑って坂を逃げ
腹がふくれた サテこれからのスケジュール
年令とゲームしている化粧品
まけさせた魚はけつきよく犬が食い
まだ下がいくらかもあるに死をえらび

大阪市

河野 君子

プログラム私の役はこまねずみ
積乱雲今日の私に解けてゆく
宝塚微熱で通う愛のはじまり
旅枕振子の重さが気にかかり
小鳥塚盆にせめても香を焚く

小浜 牧人

現金封筒に母の叱言もいれてあり
二枚舌やがて自縛の縄となる
右正にすらすら書けぬ借用証
偽証からずるずる落ちた蟻地獄

風に鳴る旗 甲子園に夏が来た

富田林市

岩田 美代

虚勢はる言葉の影が細すぎる
真すぐな人の話がむし暑い
重ねたる女の歴史梅らつきよ
透明な夫婦になつて神経痛
燃えて落つ夕陽に未練の朱が残る

藤井寺市

西 いわを

写経して蟬の声など聴えない
八丈へ流人たずねる夏の旅
残り火はほのぼの音もなく消ゆる
地藏盆夏も終りと蓮の花
裏側も顔を刻んだ飛鳥仏

岸和田市

高橋 操子

純情な瞳に折れて悔はなし
親の気ままこんな言葉を押しつける
思い出をしまふ制服に虫がつき
熱やと引いて時計のねじを巻く
墨の香へ正座の心引きしまる

桜井市

岩本 雀踊子

智恵の輪へ夫婦に金のいる話
信楽の生れで狸 男なり
射程距離にライバルがいるゆとり
あわてものなどはおらぬ蝸牛
本人と知ってくれている母印

大阪市 吉田 圭井堂

億万長者軒を列べて寺無住
道端で蹴りごろだからまた蹴られ
鉢植の茄子初なりと娘が届け
達者ですだけでいいのさ待つ葉書
蜜蜂は採って来た量自慢せず

岡山県 嘉数 千代香

喝采の中で妬心の音を聞く
戻らない日記へ廻る風車
失敗をみつめる冷たい目があった
も一つの心が札束に傾く
尾灯点となりて空しさだけ残る

大阪府 本多 柳志

誓詞莊重ああ人生の三番叟
ああそうああそうと陛下嬉しい五十年
肩書もなく汚職に遠いイス
酌ぎ合うて過去は問わない縄のれん
俊敏な男の舌に針があり

西宮市 島居 百酒

敗戦記また繰りかえす夏の雲
ひもどけば勝者のエゴに湧く戦意
銭にならぬ仕事で吝な恩を貸し
石無情寄れば有情の庭となり
廃舟を焼く火 夕靄に悼まれる

東広島市 高橋 鬼焼

赤字線鉄路の詩が錆びて行く
鈍行の早さで雲の旅つづく
八月の化粧おぼえて妻若し
ひろしまの風も無口だ原爆忌
島の子に夢をくれない海の赤

八尾市 香川 酔々

首塚の主が変身黒揚羽
百獣の王に翼さのない自由
倒産のビル屋上に正一位
日帰りで薬師如来に会いに行く
煩惱を静める椅子が置いてある

島根県 堀江 正朗

子の戻り待ちつつ酔えぬ酒を酌む
いつまでも若くはないと足が言う
妻そつと蜘蛛を逃してから掃除
目と耳の相違新語のややこしさ
背がまるくなつて倅せ同居する

島根県 堀江 芳子

こわごわと初孫ふんわり抱かせられ
湯上がりでの生まれ変った気で五十路
続柄妻と書き入れ満ち足りる
虫鳴いて心の友になる夜長
ためらわずいつか埋もれる土地を買う

宝塚市 傍島 静馬

アルバムの老妻はおぼこい高島田

金婚夫婦どっちも辛抱したなと思ひ

お邸と長屋で友情遠ざかる

後進の秀句が柳歴おびやかす

家庭教師つけても蛙の子は蛙

鳥取市

河村日満

ナイターに妻が同意の茶がうまし

責任をもつ男であちこちに託び

銀めしにとびついた子もすでに父

眼の動き聞えぬ振りの嫁と知る

ちちははとこころで語り墓洗う

新宮市

大矢十郎

花火見る人の善意の忘れもの

早や過ぎるものに他人の七回忌

企みを汲む盃がにじり寄る

臨月の若さ踵の細い靴

点滅へリズム合さぬ警報器

貝塚市

野坂つき子

昨日とは別の女になりたくて

フレッシュなトマトに似てる夏の恋

潮時を知らぬ男が泣いている

失言をホットに包んでくれる友

澄んだ瞳が打算の女笑ってる

倉敷市

藤井春日

それなりの生き方もあり名無草

目を通す書類へ限界来たを知り

蟬のような人間脱皮して見度し

喜寿近く葉の味をまだ知らず

Dライン横綱歩く姿なり

美称市

安平次弘道

悪銭も汗した金も同じ価値

球場で突撃ラッパ聞く平和

競い合う魚拓釣場は事故を秘め

性善説信じていない刑事の眼

偏差値に少年夢を拒否される

松江市

小林孤呂二

生きがいへ白いエプロンよく似合い

蠅がいて蚊がいる生活変らない

二代目の若さ名刺は横に刷り

方言に安らぎがありビール干す

朝が来る幸せ靴が光っている

竹原市

森井菁居

人生もかくの如しと泡が消え

いのち素晴らしカルテを信ずるとき

残暑愉しやビールを冷やす妻の居て

蟬殻を土産に思惟の旅終る

一本杉ふと童心をよびます

鳥取市

両川洋々

終戦の日から君が代嫌い抜き

人の世の惨さに三面記事が混み

子を叩いた自分を叱る日がつづき

拘置所で金の力をまだ信じ
告白を聞く風紋の砂も燃え

兵庫県 遠山可住

白髪少し混ざるかつらがお気に召し

お見事な西瓜尺貫法で賞め

山小屋に寝るには惜しい星の数

朝顔にそつと見られていた素顔

蟬は蟬とんぼはとんぼの止まる枝

大阪府 宮尾 あいき

スカートへ口づけ残した百合の花

すがり付く相手が欲しいいなびかり

かまととやないかと鈍感疑がわれ

もう隠居したらどうやと他人様

盆踊り音頭とるのはカセットで

大阪府 金井文秋

まだつぶし効くから子らが来いと云う

鈍感なくせに損得すぐわかり

金はさびしがり集るとこへ寄る

ドック入りやいやい云われるのも齡か

若い氣でいるのに齡を知れと云う

松原市 玉置重人

坐禅組む心に遠い蟬しぐれ

表彰状二十五年の墨の色

ああ軍歌大和男の子の鎮魂歌

もまれ抜くラッシュに主義も主張もない

天神さん鱧が売れてる食いだおれ

松江市 恒松町紅

不純とは知らず二人のレモンテイ

気休めが半分はある葉のむ

亡妻の夢だったとはよう言えず

戦争の苦勞を知らぬ軍歌きく

ゲートルを想う八月十五日

鳥取県 林 露杖

変容を遂げて紫陽花うなだれる

遠花火消えた彼方に秋動く

全身の汗を手向けて墓洗う

蝸の中なる静寂書にひたる

昂ぶりに喘ぐ女の歎めき

大阪府 天正千梢

振り返る余裕これが花道か

二人三脚汗ふき合うてつつがなし

コニヤックを両手にはさみ泣いている

一ページの日記化粧として閉じる

午後三時そろそろ西瓜冷えた頃

富田林市 和田維久子

我が心縁に染めて旅ひとり

すばらしい夢は瞳の裏に住む

知る人も無き青春の画帖閉ず

嘘のない家の空気がきれい過ぎ

タイムカプセル開けるその日を思うまじ

呉市 林野甦光

島のない海で逃げ場を見失ない
雲よなぜあの思い出が振り切れぬ
立読みの足に秋風しのび寄り
人生は一度切りなり忙がしい
停年の朝から靴が光らない

大阪市 中川滋雀

一人ではない旅立ちの笠があり
八百八段大悲がしみる汗と知り
人生の端役に生きた自尊心
良心を売った薄利で食いつなぎ
愚痴を聞くビールは冷えた生返事

島根県 錦織文子

南紀の旅悲恋の塚へ夕日落つ
悠久の音壮観たり那智の滝
降るような星へ未来を問うて見る
おのが主張しめて胡瓜すねて見せ
この傷心今日の夕日に染まるなら

東大阪市 落合思月

諦めて見ても傷口ふさがらず
せめてもの抵抗ベランダへ野菜
定退の目に羨ましい蟻の列
袖丈が合わぬ仲人のモーニング
ケースワーカー自腹の菓子置いて行き

伊丹市 樫谷漫柳

お説教温いビールで締め括り
枝豆が茶色 場末のビヤホール
当日は鰻売らない古のれん
おごってる方も楽しい大ジョッキ
恍惚の日のためオシメ仕舞つとき

出雲市 原 独仙

針に糸老いの視力に従わず
歌手の夢はかく消えてトルコ嬢
胃カメラの指摘に従順なる日々よ
土堤の恋今絶頂へ遠花火
残暑なお平穩に照り稲肥る

倉敷市 稻田豊作

慰めが言葉にならず抱えあい
哀歓のいずれも嗚咽になる女
残照も消えて墨絵の瀬戸の島
笑われて笑って孫の握り箸
子の意見鼻でうなづく父の意地

和歌山市 沢山福水

燃え尽きて虹は佗しく消えてゆき
口紅の赤はカンナに勝てはせぬ
盆踊り幾年挽歌繰り返し
白白と朝はドラマの色に明け
人生に女は二度の勝負する

富田林市 板尾岳人

峰一つ越えてもひとり山の巾

父のことばかり聞いてる山の峰
西風に雨具わすれた山の峰
母達者父はあの峰愚痴なり
遺言状父は金剛山を書きわすれ

大阪市

大坂形水

鬼も齡めつばう涙もろくなり
衰えの自分を知っているベテラン
老人病だなんと藥だけくれる
砂浜のガラス背筋が寒うなる
新聞を読む妻の横顔が老け

米子市

八木千代

はぐれ鳥 雲のぬくみも忘れかけ
水洗トイレさえ大山の光る水

嫁姑 女 女をみとめ合い

病母のみの日が明け暮れる 髪洗う

豊中市

戸田古方

指が美しいので小紋がよく似合い
ただの水味がないからおいします
向日葵みたいにボクも太陽憧れる
朝を吸いに出れば鈴虫しきりなる

高槻市

若柳潮花

花柄のグラスで男何を飲む

菩提樹へ比叡も夏の汗が泌む

ピーナツの味を小菅で噛みしめる

墨染の衣の裾にふれる萩

身仕度の背中に戻る日を聞かれ
いっばいに髭をはやして漫画読む
水浸る流人の墓に光る苔
溺れ谷南仙峽が崩れそう

神戸市

仲 どんたく

西瓜選る時ドクターとなる打診
蟬時雨 死者のわめきか原爆忌
済んまへん済むまへんと尻こじ入れる
中国展 奴隷の悲歌がにじむ壺

宝塚市

小畠無聖

見解一ミリの差 理智を拒絶す
くさっても鯛かのけぞっている汚職
十二時で重なる針へ嫉妬する
雨の裸灯僕の心を洗うよう

大阪市

江城修史

執念に生きて涙は捨てました
斗病の昼寝へ風鈴語りかけ
隙のない男よ仮面が重かろう
古傷の深みへ立てる白旗か

岡山市

川端柳子

女のぐち吐き出すくもの糸に似て

夫婦円満みやげに実家の母戻る

ともに齡加えベットの犬も老い

花々の微笑に明日の糧貰う

尼崎市 黒川紫香

大阪市

西森花村

むつかしくむつかしく書く彰徳碑

冷汗も高等動物だからかき

かけまくもかしこし祈とう料値上げ

錦鯉のようですマダム太り肉

大阪市

山川阿茶

お中元やめたらあっちからも来ず

大悟した高僧にさえ生の欲

無欲にと思えど欲がついて来る

叱ってくれる人のないのもよしわるし

東京都

山根白星

復縁をせまるめめしきいっそ嫌や

動く歯の舌に親しきもののうち

それもよしあとを継ぐ子のない居職

妹のように好きとはやるせない

今治市

原田一風

ゴロゴロと腹が鳴る日の気の減入り

托鉢の笠破れてる土用晴

本堂へ庫裏から匂う風が吹き

イヴ今日も木の実を食べた知恵を出し

倉敷市

田垣方大

医師が歳聞きなおしたと老妻嬉しそう

巣を張った蜘蛛の心か四ツ手網

悔のない一日だった白い月

名月という名目が酒になり

倉敷市

小幡里風

指先の器用がリストに乗っている

人妻の微笑に歩巾がちと狂い

待ち伏せと云う愛情が憎らしい

守り切る心に錆びぬ鍵を撰る

岡山県

直原七面山

どこでどう交る男道女道

柿の実の一つ一つに宿る秋

ふる里の味ふる里の水含む

良心を悪魔に売って紋首台

大阪市

川口弘生

他人叩くほどに自分が叩かれず

うぬぼれへ風呂場の鏡同意する

楽しい日雨戸も素直な音をたて

手術した跡は隠している水着

和歌山市

野村太茂津

焦ちを鎮める茶室の湯も沸ぎる

我執の掌袂紗捌きが尚乱れ

尺八の余韻虚無僧も酔うている

合掌のそのとき御先祖さまに叱られる

柏原市

大峠可動

太陽に吼えろ路傍の世は深し

自画像は未完 壁画の謎に似て

四季の国匂い忘れた花もあり

夕日が大きくて希望甦る

今日の嘘日記に恥じて小さく書く
大阪市 黒田 真砂

古い知らぬ母であつたと墓に水
色褪せたあじさいに老醜の已見る
心の傷秘めて女の旅衣

遺句

名古屋市 吉田 水車

あるときはいやらしきものよ金の色

頭数かぞえて板場汗を拭き

藤村の心をみたり馬籠宿

年のせいかこの頃掌を合せ

松江市 中川 晃男

青春の汗 栄光の熱球譜

彼も弱い人間だったか前首相

虫の好かん男で蚊にはよく喰われ

おみこしのゆすりに不況乗って来ず

泉大津市 村上 春巳

初風呂に入れて頂くそんな歳

仁丹が臭うお人の白い髪

タンカーの勇姿不況にもてあまし

人間の世界に飼われたリスの贅

島根県 小砂 白汀

イニシャルを打った下着を風が盗り

フルートよ泣くなあしたが無いじゃなし

ぼろんぼろんと音を輪切りにしてハーブ

生まれ出る刑まぬがれし無精卵

ローカル線乗り変えてから旅本調子
八尾市 宮西 弥生

夢をもつ女 地獄には溺れまい
よく迷う女で好む片目だるま
ゆりかごに渴いた女が眠ってる

岡山県 竹内 翁童

無責任に合づちうっている商談

一晚で飲んでしまえそう退職金

感動のドラマ虚構を越えた芸

返礼のいる中元ばかり来る

堺市 高橋 千万子

行きずりのお茶でも飲もうから炎える

遺族まだ納得出来ぬなな梯子

催促の菓子折鈍感に甘すぎた

心配するなと言う息子との断層

藤井寺市 児島 与呂志

うまい酒今日の充実意識する

追い駆ける女の嘘が目立ち過ぎ

妻の目が女になって明日休み

朝顔のつるやけに延び花が無い

竹原市 小島 蘭幸

大合唱へキャンプファイヤー燃え尽きぬ

みそ汁は男が作るのもキャンプ

裏の裏まだふんざりをつけずいる

野心かも知れぬひそかに書を習う

倉敷市 野田 素身郎

野良猫がまだのぞいてる妻の留守

矢印は悲し告别式をさし

口やかましい妻で夏瘦などはせず

吊革を両手で握り夏に耐え

鳥取県 鈴木 村飄子

おんなありそこに女の病あり

テント村今宵はアダムイヴになり

夕陽から朝日の村へ嫁が来る

お母さんの片腕はまだ嫁がない

岡山県 出原 敬一

二代目の豆腐屋すこうし遅く起き

仕合わせな雑種獣医を呼びつける

食事中の雀鳴子に田を移る

久し振りの願いへ神さま留守の音

西宮市 藤村 べ女

胸にまたたんで母の丸い顔

行きずりの愛が崩れる秋の雨

山の辺の道野仏に柿する

柿一ツ故郷の夢は雲に乗り

奈良市 宮口 笛生

盆の月大きく亡母の日がめぐり

もうかなんもうかなんと夏嫌われる

人間もダウン寸前夏続く

二次会のビール一本のめぬまま

竹原市 時 広 一路

三面鏡いつまで騙し通せるか

別れ道今更ここで迷われず

過去の杖明日の道には使えない

寝不足の貯金をおろす風爽か

守口市 野呂 右近

反論も出来ず番茶で見るテレビ

風船を三つ四つ割りたい日の焦り

夾竹桃燃え水銀柱押し上げる

凸レンズ二枚通して広辞林

鳥取県 清水 一保

愛情の論議満ちたる顔ばかり

人類の使者へ火星の無表情

風鈴と風の対話に詩を抱く

ダメ押しのように前歯がまた背き

愛媛県 渡辺 曉童

団扇の風は 母親の味

故郷の風に とける白絹

色の好みは 朝顔にさえ

凌ぎ易さえ 万両の赤

大田市 藤田 軒太楼

再会の握手も温くし戦友会

回想はつきず死線を越えた戦友

旅立ちの紅吉兆へ結びつけ

光ってる内はせつせつと磨かれる

倉吉市 奥谷弘朗

心機一転菊鉢に茄子を植え

趣味聞けば女フフフと笑うだけ

人生を楽天と観る果報者

味噌汁のさめない距離にいて足らず

松山市 谷のぶお

頑固親父の髭がこらえている涙

夏草の中にむせてる地蔵さま

エフつけて無事に戻った忘れ傘

野良猫のふてぶてしさが悠然と

大阪市 河井庸佑

生涯教育テストいつまで続くやら

山の手に住んでプライド高くなる

夢を子に託したママのしごきよう

昇進へみにくい社会見てしまい

生駒市 草深酔升

勝ち抜いた瞬間母の顔浮かび

夕風に梧葉影絵となつて揺れ

読経する調子に合わせ蟬の声

気象庁あすのプランを迷わせる

大阪市 室谷徹舟

初めての家を尋ねる炎天下

冬服で夏の葬式かしこまり

お互いに値踏みしている女の目

一と言が云えず寝返りばかりうつ

今治市 越智一水

催促をされてうまいと言う夫

日本アルプス西穂高岳登山

山荘を霧がつつんで詩がわく

アルプスへ女素顔で立ち向う

岩肌を登れば登るほど無心

島根県 太田亀甲

五百羅漢中の一人が祖父に似て

もう買わぬ株を電話に呼び出され

先着は浴衣に替えて碁を囲み

赴任する今度は魚の釣れるとこ

松江市 柳楽鶴丸

倅せの拳骨は痛くない

道草をしましたプラスになりました

落ち目になるとスキヤンダルがばれる

狼にならないように飼育され

松江市 岡崎祥月

あじ気ない箸もて遊ぶ妻の留守

老いてなおもとめる愛の行進譜

すきのない男に女すきを見せ

音楽に才能がなく歌が好き

東大阪市 竹中肖二

雄大なロマンは海に育くまれ

謙虚さは何時も会議の隅に居る

真実を盛った予算は組みなやみ

本職の仲人口の裏を読む

東大阪市 竹中綾女

改造の厨まごつくことばかり

乱雑でも恋しい元の台所

がらくたのさて多過ぎる台所

明るさと広さにはずむ台所

宇部市 平田実男

スカウトもしのぎを削る甲子園

母一人残暑の厳しさ背負い込み

ガリ勉へ陽焼けさげすむ目で見られ

パトカーが前にいるから渋滞し

諫早市 原田明春

先着百名へ女がめつく並んでる

ボウフラはみんな蚊になる技をもち

サンプルのような女房で物足らず

お盆でもゴキブリ叩き殺される

呉市 榎田英詩

わが墓碑に無念と刻み敗者たり

及ばずも恩師へ一步近付かん

A少年に母の慟哭身にこたえ

ちちははに楽がさせたい子の焦り

京都市 都倉求芽

愛称で呼ばれて定年また若い

シャーベット冷たい舌で恋を抱き

せわしげな扇子が決断下せない

終戦の日

軍歌もう ただの行進曲となり

大阪市 西川誓二

負けた国の悲願まだ遠き北の島

衣食足って昔の不義理思い出し

水は低きに流れて昂ぶらず

口が滑って揉めことの種となる

京都市 松川杜的

六道参り(二句)

六道の鐘は冥土へ届く音

珍皇寺ろうそくで聞く地獄図絵

鐘三つ叩いて何を祈ろうか

夾竹桃京の暑さに住み馴れて

大阪市 神夏磯道子

ジীবンの男女違えたタミナル

むし暑い夜を這い廻る油虫

貧しさや金の重みに負けてくる

商談の隣りは甘いレモンティ

枚方市 宮川珠笑

神前へあずけた邪心が帰路を追う

香水を久しく知らぬ妻の肌

信号の青を巡査の横で待つ

列車出て駅手ゆっくり水を撒く

兵庫県 河原みのる

民 素直五〇円切手にもう慣れて

ぶつきらぼうそれでも売れるから老舗
処女懐胎節成り胡瓜にみつけたり
淋みしかるなアばくの背広のバッジ穴

大阪市 本間満津子

たてまえを通す世渡り息が切れ
才色を備える妻が居る浮気
ご先祖にかこつけ避暑の里帰り
恐いのは幽霊よりも入場料

兵庫県 大江秋月

一日の汗ふきとばしている大ジョッキ
七ハンの若さが忘れている生命
犠牲者が出てから信号ついた辻
農繁期農夫に明日という日無し

大阪市 津守柳信

泣き寝入りしても夜明けが待っている
ほほえみを誘った事もある寝顔
安定剤ほしい夜更けに夜泣きそば
考えをなくした葦も立っており

樞原市 岩井本蔭樺

泣く人も無くすいすいと葬儀済み
愉快な日人さまの顔丸く見え
山蟻に蟬は御輿のごと引かれ
清水の舞台背を押す人が要り

京都市 山本規不風

バラックの仮居励まし税吏辞す

心とは別な言葉が妻を刺す
生きていてよかったと妻バリーで云う
ゆったりと腕組み合うてシャンゼリゼ

和歌山市 若宮武雄

連れ添うた散歩に歳のかげりない
気心に触れて見直す顔かたち
土曜日の夜もはずまぬ倦怠期
岩の顔波の誘いに動かない

和歌山市 津田与史

ああ軍歌まだ軍人の血のかから
交通便環境良は墓地でした
七転び起きないダルマも中にある
狭い家冷たく抜けた秋の風

東大阪市 市場没食子

悠々自適死ぬのを待っている姿
胴体を支える足のために痩せ
精神年令負惜しでなし判るかなア

平田市 久家代仕男

世渡りに疲れて捨てた星の夢
リヤカー引き男まさりの束ね髪
帯鋸が炎暑挽き割る音をたて

西宮市 若林草右

純血を信じた朝顔の色がわり
暑くるし派閥派閥の蟬時雨
スロービディオになってみたかろ蟻の列

姫路市 梅谿庵 不 醉

馬鹿馬鹿と言われりや馬鹿も腹が立ち

同じ汗かいても私キャデーです

振り上げた拳家内は口で受け

米子市 増 田 竹 馬

寡婦チラとスリル楽しむ隙を見せ

丁度よい角度盗んでほしい唇

石庭が濡れて心音確かめる

羽曳野市 塩 満 敏

昭和の関を雌鳥が告げる

庭の浜木綿白浜を恋しがり

あの時も同じ暑い日原爆忌

和歌山市 吉 野 富 子

口下手のうそはねちねち廻り道

さりげない失言笑顔で受けとめる

幸せな日々の日記は二三行

玉野市 小 谷 仙 山

日記一行今日も平隠無事にすむ

正直に言うから恐い子供の目

網張って待つてゐる方がくたびれる

香川県 岡 田 拳 法

責任を持たぬ命令柔らかい

親切の押売りもする老婆心

両方を叱って痛み分けにする

小松市 馬 場 魚 山

探ぐるよに五十女の眼が話し
案山子にも出番自然がよみ返り
家元に育ち五才が初舞台

島根県 大 森 孝 華

風向きヘリダープランたてなおし

感激の涙ハンカチぬれたまま

円満へ目をつぶることおぼえたり

唐津市 新 岡 回 天 子

珍らしく水澄まし泳いでるみぞがあり

美しい人に道順きいて見る

発表がこわく他人に見てもらう

大阪市 藤 田 頂 留 子

月も顔河内音頭に踊りたそう

仲たがえひまわり一本そっぽ向く

三十四度ツクツクホウシが秋を呼ぶ

鳥取市 大 塚 豊 生

ふと覚めて深夜菩薩の声を聞く

夜学の灯めざすバイトの荷に挑み

淋しさも不安も寡婦の軍手干す

東大阪府 桑 原 喜 風

家風には染んで小さな倦怠期

アアソーと陛下矢張り神でない

税務署のお越し怪しき物は捨て

堺市 伏 見 茂 美

疎遠なる子を思う日の乳房かな

いためもの玉葱切つてと共かせぎ
セックスの不満も聞かす立ち話

和歌山市

内芝としよ

ねだられる玩具へ財布が弱り果て

洗濯機廻って平和な朝の音

負けん気が富士登頂の八十才

鳥取市

小林由多香

三度目の受験神様にも頼み

言いくい話電話でぬけぬけと

ふんぎりがつかない爪を噛んでみる

大阪市

神田秀峰

太陽に逆い生花北を向き

もう三度若くなりたい恋の花

機械には応用効かぬ泣き処

仙台市

川村映輝

散ることを知ってる花が清く咲き

善人の怒り血圧すぐ上げる

間違ったときはコンピュータのせいにする

和泉市

西岡洛醉

石仏明日の歴史へ黙すまま

手のひらの幸せでよし今日を終え

妥協する線に続いて蟻の列

笠岡市

松本忠三

夏季手当使い果して盆が来る

馬鹿になりきれず大声をはりあげる

情勢の変化と軽く逃げられる

貝塚市

行天千代

茶柱が立ったに友の悲報来る

枕して明日有る事を信じよう

味くらべ挑戦したい母の味

川村好郎

いま生きているこの確かさに生きる

今日も又弔電打っておく残暑

なすな恋その加速度を危なかり

タクシーは払う気助手席に乗る

描き眉毛アイシャドー鼻は放つとかれ

西尾 栞

華麗なるUターンして金魚

福耳の石の地蔵にある思い

雷に義妹は僕の部屋を出ず

おどろきの乳房に娘育ちけり

箸袋集めて楽しい旅にあり

菊沢小松園

私が死ねば途端に歴史も止まるだろ

風を逐う雲のところが判るかえ

詫びに来てそのまま男上り込み

くずれない積木を子供喜ばず

疑えば袋の中も頼りなく

若本多久志

白い花こよなく好きになって老い

書架いつか長生きしたい本を積み
平穩に又敬老の日を迎え
自分では余生などとは露ほども
合理主義でもある時は眼をつむり

尼 緑之助

核家族ほどよく継ぐ電話線
踊りの輪抜けて浴衣の恋進む
海開き裸群の肌がまだ白く
顔の皺無駄に刻んだわけでなく
汐風と語る心の安らぎよ

正 本 水 客

早起きをうんざりさせて雨を見る
早晩の雨 朝顔はかたくなに
目さましの庭掃き招かざる雑草
密植の庭で蚊に襲われる
ただ孫の監視往時を追うて海

浜 田 久米雄

島は船を迎える気配がなく続く
黄水仙カンゾウ巨岩の色を深くする
吊橋を渡れば露天風呂明けてくる
ゴウゴウと川が流れて宿の庭
山菜の宿 あるじと心通じあう

橘 高 薫 風

相槌を打ってただで物足らず
自分だけわかった洒落をまた飛ばし
口止めはしたが頼りのない男
ところにより俄か雨とはうまく逃げ
お天氣のせいで仕事をまた延ばし

本 田 恵二朗

蜘蛛の巣にかかる裸形は恋の磯
顔に蜘蛛の巣ロッキード二百日
篠山にて酒好きの英断氏を憶う
酔わざらめあかとき青き栗のいが
綻びを繕うごとく鳴くちちろ

第23回 八尾市民文化祭

市民川柳大会

時 所
10月11日(祭) 正午開催
八尾市商工会議所 三階大ホール
近鉄(大阪線) 八尾駅下車南東三百米
八尾市役所前

柳 話

兼題及び選者(雅号アイウエオ順)

「矢」……………森中恵美子選

「親」……………橘高 薫風選

「神」……………菊沢小松園選

「民芸」……………西尾 葵選

「戦」……………福永 清造選

「流行」……………三条東洋樹選

若本多久志氏

「鯛」……………増井不二也選
「会う」……………西村 芳川選

◎席題なし、各3句吐締切午後一時三十分

▼投句先下581(八尾局私書箱第9号)

八尾市清水町一丁目一六、八尾市立公民

館川柳係(投句締切10月2日受付分まで)

▼ご出席の方は当日投句受付いたします。

俳風柳多留廿五篇研究

— (十二) —



紀内恒久

205 せふばつハ指と髪とでわかる也

青木——吉原での賞罰で、賞の方は女郎の実を見せる「指切り」であり、罰の方は遊客の嘘を制裁する「髪切り」の事で、共に一見すればすぐわかるというのである。

賞は指をくれ罰は髪切にし

拾五・4

賞罰たゞしく指を切り髪を切り

三六・20

岡田——同。

206 虫の付かぬ内と桐の木をひかせ

青木——女の子が産まれると、すぐ桐の木を植えるという習慣があり、嫁入のときはこれで簞笥をつくって、という遠い親の配慮も成木

青木迷朗・西原亮・鈴木黄
室山三柳・入江勇・清博美
八木敬一・紀内恒久・岡田甫

になって虫が付いてしまつては何にもならない。娘に虫が付かない内に嫁入りさせたいのが親の心。「虫の付ぬ内」は桐の木と、句の裏にある娘との両方に掛っている。

桐の木ハ村の娘とおないとし

二五・32

鈴木——賛

まづ桐を植へ離市へ亭主行き

二八・26

岡田——同。

207 藪針医あたかも蜂のさすことし

青木——「藪針医」は技の未熟な鍼医の事。

藪針医実にも藪蚊の刺す如し

五二・25

主題句、例句共にばかに痛いので、「藪針医」とのしる如く、上五にすえたのであらう。針医の句としては、

こいつめがわきをいたすと針医云ひ

拾十・2

はりたてハ千秋楽に腹をなで

拾十・26

室山——同。「針」と「蜂」と「さす」。

八木——同。形容おもしろし。

岡田——同。

208 わつちのハ蟹はたんさとはやるやつ

青木——「蟹牡丹」は俳優八百藏の家紋。「わちち」「はやるやつ」の語からして、これは

多分踊子、芸者の類であろう。最良役者の紋である蟹牡丹を手打簪か何かに付けていることを、得々と吹聴しているであろう。

西原——賛。なれど、蟹ぼたんの家紋が市川八百藏であることの証拠が欲しいものである。

八木―諸資料からみて、八百蔵と蟹牡丹との関係は、「替え紋」とまでは行かず、単に彼がこの模様を好んだぐらいのことかも知れない。

岡田―同。

209 花物をいわず傾城落手する

青木―「花物言はず」は、『和漢朗詠集』の菅原時文の文から出た語。また謡曲「三山」に「花物はす」と聞つるに、など言葉を開かすらい」とある（『川柳辞彙』より）。

句意は、客からの床花を無言で手にするといふのであって、今のところ物を言わないが「ほれ葉佐渡から出るがいちちきき」（二五・18）という事に相成る。

花物言はず遣手をにこつかせ

一六・6

室山―同。「花物を言はず」は「三山」（現在は宝生流のみ存在）なれど、「花もの言はぬ」は『西行桜』や『雲林院』等にもあり。

『川柳辞彙』の謡曲名は、どうしたことか、遠い曲を採っていることが間々あり、普及曲にそれがある場合は、その方を引かれた方が無難。

入江―同。通人は直接手渡さず、煙草盆の引出などにそつと入れておく。

惚葉二帖国府の中へおき
にっこりと多葉粉をひねる三合目

二六・30

岡田―同。

四七・37

210 来る人に娘うくひすやひわであひ

青木―「うぐひす」、「ひわ」は、各々「鶯茶、鶯茶」等染色の名。句意は、嫁に来た当座は、親戚の人（亭主側の）が来ると、鶯茶や鶯茶の派手な色あいの着物に着換えて挨拶に出るというのである。嫁入先での、嫁もまだ客分あつかいという誇示。

西原―賛。鳥の秀句でもあらう。

室山―礎稿プラス西原説賛。鳥づくし。

八木―鳥の秀句であり、且つ「……茶」の茶という字を出さないでまとめたところがミツである。

岡田―同。

211 哀さハ土手に火ばちの遣ひすて

青木―不明だが、駄勇解を記せば、火鉢は吉原妓楼から捨てた、ひび割れなどして使用に耐えなくなつたものをいうのであらうか。一般的な火鉢では「哀れさ」がピント来ないように思われる。

西原―引ヶ過ぎの、茶屋が外に出した火鉢であらう。先きごろまでの往来のはげしさに比べて、哀愁さを火鉢に見出したのであらう。

室山―礎稿賛。痴話、駭引、振られた客その他をいろいろと見聞した火鉢であらう。

入江―同。あるいは、たまた茶見世の跡とも。

八木―妓楼で心中があった場合、その部屋の畳建具等は勿論、一切の器具は非人に引き取らせる。この場合、かさばって金額の張らない火鉢などは、土手に捨てて行くこともありえよう。

紀内―不明。川柳で「土手」といえば、まず日本堤と限定して良いと思うが、「火ばち」が全く不明。

岡田―「哀れさ」から見れば心中説に賛。

212 大あせでちさん古着やほとたゝみ

青木―持参嫁の虫干の句。

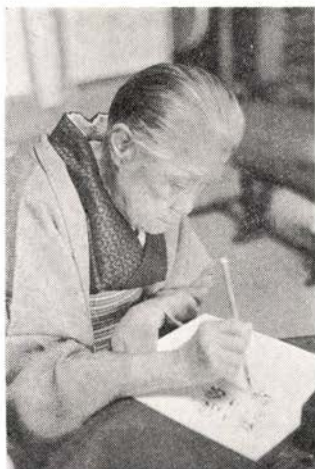
笑らハば笑へ長持が十五さは

二二・25

どつとせぬ姫けふもほしく
室山―同。「ちさん」と「古着や」の結びでもあらう。

岡田―同。持参金づきの嫁なら、衣類もたくさん。

不朽协会会员から、川柳の母として
慕われる藤生霞乃先生



藤生路郎物語

(22)

―霞乃書簡の文学素養―

東野 大八

本稿に随処に引用させてもらっている「霞乃書簡」は、大きなファイバーの手文庫二つに溢れるほどになっている。八十余歳の老女とはみえぬ、しっかりとした筆致の一枚、一枚には並々ならぬ教養に培われた文学素養の香気に溢れている。たとえそれが何気なく思いつくままに記されたハガキ一枚の文面にしても、にじみでる才能に托された女性の奥深い年輪といったものが感得され、時には感動の吐息すら流れでてくるのである。

路郎もこの妻の文学素養を認め、高く賞揚していた節が、川柳の彼の文章の随処にうかがわれる。川柳雑誌（39・5・6・7）の「妻を語る」のなかに、大正三年五月発行の「一番」五月号誌上「みなみ」という短篇の一部

を再録している。明治期の自然文学の影響をうけたとみられるその筆致には、リアルな風景描写はよく対象が捉えられている。

忙しい忙しいと口癖のように言うていながら、毎晩のように出掛けていくのは道頓堀である。と言っても別に役者にヒイキがあるのでもなく、出雲屋の匂いが殊更に好きだからと言うのでもない。とにかく、あの辺をブラブラおねりのように、行きかへりすることが好きである。

バーの白壁に高くかかっている赤銅のランタインや、前茶屋の板敷の大火鉢や、それをつらんだ舞妓の美しい白い襟脚や、黒づんだ道頓堀川にうつるやわらかい灯の色などを見てい

るとかえることがいやになる。もし私が男だったら紙治ではないが、魂がぬけてとほとぼと我が家ながら高い敷居を越えたでしょう。私は南向に寝なければおそわれる程、宗右衛門町あたりや、道頓堀川の憧憬者である。

道頓堀と千日前は、目と鼻の近きにあるけれど、私は玩具箱のような千日前を歩くことを好まない。またあの活動写真小屋の無数の電燈は、恰も安物の後櫛にちりばめた新ダイヤのようだ。そして千日と言えば掏摸を連想する。花宗の薬玉のかんざしや、水に濡れた法善寺の敷居道をひきずる下駄の音などは流石に忘れられぬが、私にはそれ以上、千日を觀賞する力がない。

私は南へ行くと必ず橘屋で臍（へそ）鰻頭（うなぎ）を買う。

私の十二、三の時は一個五厘だったが近頃は一銭になった。値段のわりに味がよい。煙草屋の別嬪(べっぴん)さんより有難いオトリであると思った。

葭乃書簡(その一) 以下要点のみ

正月もすぎ、二月を迎え南紀、大和、京都の梅の便りを耳にしながら、どこへもゆかず家にくすぶっています。女とは生命のある限りお台所とは縁切にはならぬ宿命を持っています。男が外に七人の敵があるのと同様です。私はまず一日のうち午前三時頃までは、家庭内のパートタイム、午后四時頃からは完全フリーの身になります。「武玉川」は昨日午後から晩までに残らずよませて頂きました。みな参考になることばかりで面白く拝見しました。でも破れ袋みたいな頭ですから、すぐにこぼれ落ちて終いますが、必要な時には又思い出す事もあるでしょう。ありがとうございました。

私が住んでいる生駒から大阪の方へ、山ひとつ越せば石切、其の次の額田という駅でございませう。その昔、萬葉第一期の女流歌人で天智天皇の弟君にあたる大海人の皇子とは恋中の額田女王は、多分のあたりに住んでいられたのだらうか、などと思ひながら、近鉄で難波まで行くことがあります。去る日、若草山の山焼を見に奈良雲雀ヶ丘にいる奈那を訪ねました。雨あがりの後であったので、消防も出揃っているのに美事な山焼はみられま

せんでした。昔奈良公園で野外川柳会を催し打ち上げ花火で路郎揮毫の川柳を空高くただよわせた事を思い出しました。大和平野はあられ降るような寒い日でも遠くの山々は霞んで見えるところです。先日、ベ女さんが訪ねて来られました一泊どまりでどこかへ行きましようとお誘ひ下さったのですが、近頃はホテルへ泊るにしても、ロープ携帯でないと危い世の中です。街を歩けば交通地獄で「としよりはひっこんでいろ」といわれそうです。レジャーで月ヶ瀬の里へ行っても昔のような風雅な梅見は出来そうにありません。まあテレビで、高原の花や小鳥でも見て諦めることにしましょう(後略)

思い出の昔

大ジョッキ並べ道頓堀の夜

葭乃旧作

さくらん坊乙女ころをギヤマンへ盛る

君と僕そしてビールと桜ん坊 路郎旧作

みな飲んでるぞビールが散るぞ夏

葭乃

真夜中もネオン流れる戎ばし

葭乃

久留久さんの残した猪口は九谷焼

葭乃

梯子酒最後誰かの顔で飲む

葭乃

南のさかり場を思う時、私はいつも豆秋さんの「橋筋は春の匂いのこう巻き」の句を思い出します。橋筋は戎ばし筋のことですが今は、その頃の情緒さらになし。

葭乃書簡(その二)

私は永い間ミッシェンスタイルに居て毎朝半時間は礼拝、後の半時間はパイブルクラス

で毎日聖句を一句づつ暗誦されました。

「あの人はハンサムだなア」

と心に思うだけでも姦淫罪を犯しているのだと訓育され「人右の頬を打たば左の頬もこれに向けよ」の無抵抗主義にも馴れ、腹立たしさも烈しさも人を疑うすべさえも知らずに青春を過してきました。その為かいまに現代の社会に対して抵抗も義憤も感じていません。感じたところで仕様が無いのですもの。

もし私の句にそう云うものがありとすれば「世は進化せりああ偉らいとなりし我等」位なものでしょう。「四面楚歌ひがむ心がそういわす」「三猿でゆけばうららかなる眺め」のようにカレンダーの下に一日一善の修養録として印刷したらよきそうな句ばかりです。

句の鑑賞を書く時には「川柳の叙景句には人間の存在を忘れます」と人には言うて置きながら、自分の句には自然を賛美した句が多いのです。私は川柳の鬼子かもわかりません。近頃は季なしの俳句も多くなり、人事も盛んに詠むでいられますが、俳句の人事はどうも気が抜けたビールのようで感心いたしません。「喉うてチョンぎす飼いおり」と云う句を詠んだ人がありました。私達はこれは面白い川柳だといいましたら、その人はこれは俳句だと主張するのです。

俳人が詠めば俳句であり、川柳人がよめば川柳だといひ得る程、両者は互いに接近して参りました。もっとも俳句も川柳も昔は同じ母胎から生れたのが、ある地点から袂を別ち

俳句は花鳥風月賛美の道を取り、川柳は人間くさい娯楽への道をとったのですから、後の世で相容ることと当然でございましょう。

私は最初から川柳というものを非常に広義に解釈していました。「十七字われらの国語なるぞかし」と「福寿草」の巻頭へも書いたのですから、十七音字のスタイルで詠むことに変りはありませんが、その内容は昔の和歌の贈答歌のようなものでもよく「蜜柑山お伽嘶にある日向」の童謡の境地であつてもよく

「父は飲み家出の母は美しく」の如く、小説を圧縮したようなものでもよく「火葬場へ続く桜の並木道」のように幽明境を異にする人と桜花の現世との対照による技巧もよろしく「病人も頭を上げて礼をいい」の人情の描写でも、又「焼場です否応なしにおいであれ」の諧謔味ある句でもよいのです。

「ふだん着で来たのがいつち泣いてくれ」の古句調の穿ち（これは小松園さんの句）「零零が零からの財布が二つある」の表現上の工夫のある句もよいと思います。

短詩型のもも世の移り変りと共に変化していく傾向はありますが、何も流行を追わなくとも老人は老人らしく、ヤングはヤングの意気で川柳すればよいと思うのです。川柳も永年作句している、何か将来のものとは違つた新感覚のものが欲しくなるもので、ある一派の若い人の作品は、こうした意欲のあらわれでございませう。然し五分も十分も、或いは半日考えてもなお判つて貰えないような川

柳は、結局ひとりよがりの句であつて、共鳴度が少ないという事になるのです。

嘗つて戦争たけなわであつた時、統制という題である俳人が

―統制やあてのひらに降る敵と詠みました。その時、私の句は

―統制統制だまつて日向見ていたり

というのでした。この二つの句を較べて見ますと俳人の句は純情な心の叫びでござい

ます。いつわぬ感情の吐露、私はこの気持を高くかいます。それにひきかえ私の句はやはり川柳人の素質にたつています。無言の反抗が感じられます。権力によつて物資の統制があつても自然は惜しみなくわれわれに太陽のあたたかみを興えているのではなからうかといふ

筆者の意志表示でございませう。

藤村亜鈍さんが「僕は川柳をやるようになってから根性が悪くなった」とよく私に言われました。なるほど川柳は、すなおな表現ができない、一応はひっくりかえしてものを見なければいけないからでしょう。

荳乃書簡(その三)

「武玉川」お送り下さいましてありがとうございます。川柳のバイブルであるという「柳多留」も「武玉川」も、私は子育ての生活に追われていたのであんまり読んでいないのです。その理由は江戸時代の風俗習慣を知りつくしてなければ、受ける感度がうすい

と思つたからです。あまりに名高い句は知つていすけれど、古句の知識はまことにおはずかしい次第です。

しかし、私は「柳多留」の句よりも、「武玉川」の句に私の好きな句が多いように思います。「武玉川」の叙景句は感覚的で印象が深いと思うのです。

―横丁に一つづつある芝の海 (柳多留)よりも

―闇の途切れるうどん屋の店の武玉川の方が好きですし

―鶏の何かいいたい足づかいの柳多留よりも

―鏡にせいてかかる鶏の武玉川の方が好きです。

―投げられて鉄の心かわりけりこの句は武玉川にある句と思うのですが、句主の感情を缺へ移して代弁させたところに技巧もあり女心がいたく酌みとれます。

―死で願ひの叶う書置の武玉川に対し現代の句に

―断固ゆるさず戒名にして拝み 一 瓢

というのがあります。私は句の調子と云うものは、句主が自分の思想や情念を詠む時の呼吸にまかす可きものだと考えて、いつもその杵をはずさずに作句しては、また調子のマンネリズムに陥つてしまします。二十字でも、二十二字でも二十一字でもよいと思います。内容とマッチしたリズムでありさえすれば……。

同人吟

秀句鑑賞

前月号から

菊沢小松園

恐ろしいもののひとつに無関心

小島 蘭幸
縁なき衆生は度し難しと、さすがのお釈迦様もお手上げの言を吐かれた。文書に放送にいくら宣伝普及しても気のない人達には何の効果もない。世に無関心ほど恐ろしいものはない。見過してゐる鎖事も積み重ねになれば恐ろしい結果にならぬとも限らない。

移り香に男の罪が匂うなり

小浜 牧人
道ならぬ衝動的な男の世界も窺えるこの場合の句の上の女のみちに純情さが見えるのがせて救いだ。男のエゴが見抜けない女の浅墓さが蓋う隣れをさそう。

格言のこれから先のあてはずれ

香川 醉々
複雑怪奇な世の中、そう筋書通りには行かない格言にも裏表がある。それを知る頃にやや人間らしくなる。急がば廻れと云うまい

物は宵に食えと言うそれが世の中というものだ。

波の私語岩は聞き役ばかりなり

川上 大輪
聞き役になり聞き役に徹底出来れば満点である。そう行けない処に人間があり人生があるのである。人生に慣れなければ聞き役はない。

虫が好かぬそんな理由が言えなくて

遠山 可住
正直者が馬鹿を見、そうでない者がのさばる世であつて見れば心ない仕儀もまた処生の術であるかも知れないが、理由のない嫌悪感所謂何となく虫が好かない人も居る。面白い人間の一断面ではある。

親孝行望むは人間だけらしい

野呂 右近
小鳥が巣立つと再び親の巣へは戻らないそのである。巣立つ日が親子の永い別れの日である。その後は何の系累のない完全なる独立がある。人間はそうあつたりは行かない、そこに親孝行という、思想も生れたのだらうが近來社会の現象はどうも斯うした考えもだんだん稀薄になつて来たように思う悲しき独立だ。

自分を許してからの自分が怖くなる

河野 君子
自分を許すとは自分の行動の開放であり縛を絶つことである。自らを開放すること恐ろしさを懸念する間はまだまだ善人の境である。ただ濡れぬ先こそ露おも厭えにならぬこ

とを祈ること切なるものである。

ああ古果はだか踊りを所望され

山内 静水
故郷へ帰つた久し振り旧知が集り早速の歓迎、昔を知る人達から酔えば嘗つての裸踊を望まれる。悪戦苦闘の都会の今の地位を知らない人達からは昔の儘の古果である。この句のあは、よく利いてゐる。老手いまだ健在といふところか。

水引のかかる浮世の義理を下け

江城 修史
内容があれば水引なんかという世の中ではない、そこに金銀の色も入用になつて来る浮世なのである。上五のかかる世にかかるが光る、義理と義理とに水引の色も褪せんなん面倒な世の中なのである。

電化した部屋で風鈴静かなり

神夏磯 道子
クーラーが幅を利かすと風鈴は肩身の狭いものになる。皮肉なものである。風流心と現実との断層に静かに自己を主張しているのである。珍重がられた嘗つての夢を抱きつづけるがらも。

割箸で指さすもあわれや壇の浦

故 吉田 水車
平家物語に物の哀れを留める壇の浦の哀史美男美女の断末魔の叫びも幾星霜の波の音に果敢なくも掻き消されては今はいはわれ、観光客のさんざめきの中に、折箱弁当に添えた安直な割箸に指される古戦場、茲にも生々流転変転極らない時の流れの姿を見る事が出来る

51年度路郎賞受賞作

染め替えて

羽織は過去を喋らない

大阪府富田林市富美が丘一四一七

岩田美代

昭和三十六年頃、富柳会に入会。故清水白柳先生、八木摩太郎先生、西いわを先生からご指導を受く。四十二年に川柳塔社同人となり、五十年路郎賞準優秀作第一席。
富柳会は男性二人、女性三人という小人数ですが、橋高薫風先生のご指導たまわる幸しいグループです。
「男爵おしやれチエー」富田林店、北野田店、駅前店経営。可愛い男の孫三人がおります。

略歴

51年度路郎賞・川柳塔賞

受賞作決定

中島生々庵

51年度路郎賞の決定が、例年どおり、きびしく緊張した長時間にわたる最後の詮衡委員会の、火花の飛ぶような検討の結果、確定発表された。9月3日夜8時30分であった。毎年のことではあるが、各委員の辛労は数カ月にもわたるもので、その内容は文字などでは現らしにくい程シリアスなものであった。

最終結論を委ねられた委員長である私もおのずから神がかりのような状態になりそう。念のために各委員の意向を再確認した上で、

確定句発表となった。ここに到るまでの手順は、毎年殆ど同様であるが、歳を重ねる毎にいろいろ新しい意見が、各委員の間に生れて来るのも当然と言えば当然であろう。こうして居る裡に「川柳塔」という人柄なり、句柄が育つというものだ。有難い蓄積と思う。

て来ても駄目であり、そして過去の内容をすっかり浮きぼりにしている。
ポケットに密柑が一つ落着かぬ
谷垣史好

51年度路郎賞入選句

染め替えて羽織は過去を喋らない

岩田美代

女性なればこそ、きれいに大胆にこの頑固さが表現出来たと、しみじみ、考えさせられた。下五の喋らないは他のどんな言葉を持つ

準優秀作 第二席

生き難き死に難き貌 檻の鶴

三宅不朽

のつびきならぬ心境が、そのまま読者にせまって来る。仮説でもなく想像でもない小説でもない。こんな句境を学びたい。

路郎賞候補作品

(到着順)

☆

若本多久志

推選句

茶碗置く音のまるさや有難し

堀江 正朗

準推選句

地の底の母までとどく冬の雨

高杉 鬼遊

秀句

一片の雲 流れに交わらず

天正 千梢

信念へ廻り道した日を悔いず

八木 千代

茜雲天地を染めて満ち足りる

金井 文秋

父はかく生きしか白梅の寒に耐え

小浜 牧人

棟梁の音痴最後をしめくくり

高橋 操子

ある時に無智も倅 瞳をつむる

和田 維久子

灰を掌にのせて人間などと思ひ

工藤 甲吉

染め替えて羽織は過去を喋らない

岩田 美代

推選句評

安川久留美師の名句で

「朝夕に茶碗の音は凡ながら」

というのがあり、私の頭に深く印象づけて

いるが、これを上廻る秀句だと思ひます。

☆

川村好郎

推撰句

染め替えて羽織は過去を喋らない 岩田美代
ひとつぐらい心見る眼にしてほしく

戸田 古方

地の底の母までとどく冬の雨

高杉 鬼遊

あの人もあの人も居て今日がある

川口 弘生

持つべきは子供とおもうそうおもひ

川端 柳子

一分の黙とうですむ記念日か

三井 醉夢

ピカピカに研いて切れ味悪くなり

傍島 静馬

軽い日も重たい日もある義理を下げ

江城 修史

昂ぶりをさとす白髪二三本

河野 君子

一びきぐらい蟻にもいよう怠けもの

不二田 一三夫

☆

正本水客

とこてん大きなよろこびなどいらぬ

小出 智子

費うためのお金ですよと妻も老い

草深 醉升

花束を買うとき男負けている

三宅 不朽

かたつむり病むなよ殻を負いきれぬ

堀江 芳子

そつとペン置けば鈴虫そつと止み

清水 一保

何一つ飾るものなき足跡よ

高橋 夕花

みの虫よ月の光りを父と見よ

三井 醉夢

飛んでみて空退屈なものと知り

川口 弘生

準優秀作
地の底の母までとどく冬の雨 高杉 鬼遊

準優秀作

千手観世の一手が枕 母眠る

香川 醉々

優秀作

ポケットに密柑が一つ落着かぬ

谷垣 史好

☆

橘高薫風

路郎賞推薦句

生き難き死に難き貌

檻の鶴

三宅 不朽

鳥が鳴く方へ振り向く軽い罪

板尾 岳人

檜の実の落ちて大樹の夢捨てず

林 瑞枝

言論の自由毒消しいらんかね

山内 静水

夢に見た春はもう少し暖かし

村上 旭童

スポーツは万能飽持となり

小浜 牧人

心経をあけて気のすむまで座る

堀江 芳子

腹のたつ時もえくばはふたつある

嘉数千代香

ざるそばを食べて革命など出来ぬ

谷垣史好

ぬいぐるみ温い童話のつめてあり

林野 避光

〔評〕推薦句は、風格に於て他の句より一

等抜きん出ているように思える。或いは、孤

高の一人物の、虜囚としての哀切限りない心

情とも解釈出来るが、作者三宅不朽君は、肺

結核のため可成りの長期間、療養所で斗病生活之余儀なくされたこと、そしてこの句は、その時期の所産であることからして、生きるにも覚束なく、死ぬことも、又、意のままにならぬ境涯に身を置いての、つきつめた自己凝視の作品と受け取る方が妥当であろう。重苦しい感慨が鑑賞者に伝わってくる。

準賞に推した句は、一口にして云えば、現代的軽みとでも云おうか、気の効いた作品で、従来の川柳塔には見られなかった句柄である。殊に下五の扱いが出色で、作者の繊細な感覚が生きている。「鳥の鳴く」とする方が良い。以下推薦句十句、それぞれに持味があり、総て充実した佳句揃いだった。

☆

西 尾 栞

推薦句

紫陽花の騙し始めは白で咲き 原田 一風

準推薦句

おふくろの十指は弥陀の掌にも似て

松下 梁水

準推薦句

今日を稼ぐ軍手左右の主張ない 若宮 武雄
陽の長さタイムカードは持たぬ妻 小野克枝
管理職手当て忠誠誓わされ 遠山 可住
チウインガムふみつけふみつけ阿波おどり

民宿へ泊り仏壇まで拝み 高橋千万里
投げ入れの花の素顔に訓えられ 嘉数千代香
乱丁と落丁が一冊になる夫婦 小幡 里風
神主でさえも神様に逢えず 不二田 一三夫
新バッジつけて企業の走狗となる 大矢 十郎
四捨五入の四捨の悲鳴がきこえぬか 稲田豊作
山根 白星
女紋女としての意地に生き 白岩 文衛

☆

菊 沢 小 松 園

こんな時の私が嫌いで顔洗う 岩田 美代
新聞の休み腹立つ活字見ず 大坂 形水
七人の敵あり君子になりきれず 中村ゆきを
冷戦の膝とも知らず猫が来る 森田カズエ
花束を買うとき男負けている 三宅 不朽
目撃者になれぬ私にひまがない 大矢 十郎
ところてん大きなよろこびなどいらぬ 小出 智子
しのび逢う部屋はノックのない世界 宮西 弥生
簡単なことだよゴミはゴミ箱へ 大路 美幸
優秀句
てのひらの上のドラマに幕がない 小浜 牧人

夢 かと

岩 田 美 代

岳人さんからお電話を頂き、間違いないだろうかと念を押すほどびっくりいたしました。月並な言葉ですがやはり夢を見ようとしと言えませんが、落ちつかないまま今日に至って居ります。哀しい思い出つらい思い出、激しい怒りの思い出などは人それぞれにあると思います。そんなあれこれをすっぱり忘れるように言い聞かせ、染めかえて過去を忘れさせた羽織。今ではやさしく私に添うてくれます。皆様本当に有難うございました。

二賞選考余聞

路郎賞のほうは毎年、推薦句六枚は無記名で主幹にわたす。二賞候補作品の原稿は一応全部ばくが預かるのだが、今回ほど選考委員の個性がハッキリ打ち出されたことは珍しいことである。それぞれの推薦句は、それぞれ選考委員の作品を見るようだった。みなさんも、ここに提出された推薦句と選考委員諸氏の雅号を見比べてみればウームとうなずけるに違いない。

(不)

51年度川柳塔賞受賞作

お早ようと

豚が正しくささやいた

島根県八束郡熊島町手結

安達潮音



川柳塔賞受賞作

お早ようと

豚は正しくささやいた

島根県 安達潮音

準優秀作第一席

てのひらの温みも

投げたお賽銭

高槻市 山田スミ子

準優秀作第二席

本当の甘さは

塩が知っている

寝屋川市 江口 度

準優秀作第二席

つまずいた石は可愛いいたまご形 大工静子

準優秀作第一席

虫一匹殺さぬ花の短命さ

森脇善彦

川柳塔賞推薦句

略歴

昭和四十三年春「かしま川柳」の安達小茶坊氏のすすめにより同人となり、「川柳いづも」の会友ともなつて、尼先生のご指導を受けて今日に至る。

四十九年夏、狭心症に脳血管を併発し句作もとだえ勝ち、時々尼先生の跡しをうける。

お早ようと豚が正しくささやいた

句評

安達潮音

豚が象徴するものは、少くとも賢者ではなさそう。愚かなればこそ、素直にお早ようが正しくいえる。しかも、自信がないのか遠慮しながらのささやき。知識に欠けるところがあつても、生きるための知恵ははばかりながら、ちゃんとそなわっているのです。

☆

大坂形水

小気味よく喚べて女は強く生き 柴田恵美子
お早ようと豚が正しくささやいた 安達潮音
耐えること慣れて人形の顔をする 松原寿子

屋下がり時計をゆるく巻いている 桑原道夫

母の日のクレパス偉大な豚を描く 柚木踏草

成仏をした貌でなし冷凍魚 中谷利美

ニヒリストきれいに魚たべ了る 芝原路春

準優秀作第二席

若竹のひと節ごとにある気魄 杉浦婦美子

準優秀作第一席

母の塩泪と汗と梅干と 高橋 古啓

推せん句

本当の甘さは塩が知っている 江口 度

☆

小浜牧人

推薦作

手のひらの温みも投げたお賽銭 山田スミ子

準優秀作第一席

手を合わす老女哀しみこばさない 松本 文子

同二席

合格は合格同土肩を組み 那須 鎮彦

さざ波の一つ一つにある夕陽 松本甫久路

目が覚めると今日も鼓動が鳴っている 吉田 落猿

おふくろと言う愚さにいてたのし

一分間の柳論

渡辺曉童

元旦だせめて眼鏡を拭きましよう路 餅一斗に春はゆたけし 霞 乃
この二枚の短冊が額にはいると小屋に新春がめぐる。こんな短冊も僅か半年にしても川柳雑誌社社員として麻生路郎社主から月給をもらった縁故があればこそ、昭和十四年尾道市での鉄道人川柳大会駅前の軸吟に路郎先生は、追手の方は駅前の宿という十四字句を発表された。
私の長女が昭和八年に生まれた時の「産婆悠悠湯です水です」の十四字句は川柳評

釈百句に推されたものでそれ以前から私は七七の句をものにしていた。最近七七の句に對しエライ反論を為す一派のあることをきく。
私はあと数年で古稀、川柳生活五十年、金婚式を迎えるがそれを機会に川柳界を引退したいと思っている。そして多年念願の武玉川十八編までから七七の句だけ抜きたい事を死ぬまでの事業としたい、だから何と言っても十四字川柳は私と共にある。

川柳塔社常任理事会(9月3日)

▼例年のように九月の常任理事会は二賞発表で会議室に台風が来る。

▼二賞発表と同人総会当日、その頃は他社の川柳大会と毎年カチ合う。とくに売れっ子選者はどうしても逃亡不可能になる。そこで今後は十月十日頃までは常任理事にかぎり禁足ということになった。

▼同舟近詠の別ワクを外すことになった。
▼二賞の選考は正に嵐をよぶ様相を呈してここにもドラマがあった。主役の脚光を浴びる人が今えらび出されるのである。

出席―多久志・静馬・百酒・柳志・栞・文・秋・水客・形水・生々庵・牧人・薰風・古方・小松園・一三夫諸氏。

受賞の感想

安達潮音

病床へ、尼先生から川柳塔賞受賞のお電話をいただき、意外のことに驚きました。お恥しいの一語につきます。迷いつづけている句作への励しと受けとなっています。

「旅人」以後の

麻生路郎作品

(37)

三十八年六月号

不朽洞句帖

俺だ俺だよと銅像云いたそう

地球が一回転した間の汚職

そんな大臣がいたかねと云われ

誘拐のお役にたった電話帳

ピストルの魅力カウンターに突ッ立ちあがる

藤吉郎も少年Aの頃ありし

睡眠剤飲むなと云うた老教師飲む

眼が潰れるまでにと書き遺した本か

南海電鉄川柳会「運賃」

運賃は同じで座席二倍占め

大阪通信病院川柳会「自信」

自信ないくせに東大ばかりうけ

三十八年七月号

不朽洞句帖

人相も肝腎や 蜘蛛殺される

イゴイスト 小さな親切さえもせず

「独立機関銃隊」の試写を観て(二句)

トーチカの中でも非力者実力者

トーチカの破壊 花は咲けども

もういいよ お前とこのインスタント料理なら

交通マヒを横に曲つて喫茶に居

南海電鉄川柳会「無免許」

無免許と知れてもあとの祭の死

手術までしてたニセ医者男まえ

三十八年八月号

不朽洞句帖

感謝に価する死刑もあるのなら

被疑者が急に笑い出したり

断なくて政治もなしと思いいる

当確にもう膝枕ひざまくら

都心では恋も小さし点と点

すべてすだれの向うでの出来事さ

老妻もいつしかアクセサリーになり

鮎もわたしも妓おんならにとりまかれ

今では象も諦らめている

(馬 静 島 傍)

水煙抄

川村好郎選

和歌山市 西山 幸

隙だらけの構え作戦かも知れず
選り抜きの言葉で死んでいる対話
古寺を訪う一期一会の蟬時雨
黄昏れて海 哲学を語り出す

柏原市 小谷 葉子

秋の街ひとしお赤きイアリング
帯締めて愚かな気持ちとじこめる
淋しがりやの男やっぱり女好き
手のとどく距離になって訣れを意識する

新潟県 高野 不二

ぜいたくな悩みやせたい本を買う
脇役で満足してる顔で生き
銭数える時だけ無我の境になる
笑わねばならぬ今日は泣きたい日

松江市 本庄 快哉

喪服よく似合う妻とは知らなんだ
本当の涙小指でそっと拭く

打ち明ける気の大橋の展望台

中川晃男氏定年退官

閑になるどころか額の汗を拭き

和歌山市 樫村 ふみよ

そよ風に鳴り出しそうなつり鐘草

聡しい心と対話する座禅

人事つくさず天命ばかり待ち

自問自答のあげく分った馬鹿でした

今治市 薦本 昌道

金繰りは婦唱夫随で共稼ぎ

静いのはとほけろりと共稼ぎ

年金へ希望をつなぐ共稼ぎ

サロンパス貼って明日あり共稼ぎ

豊中市 安藤 寿美子

雷も遠くで鳴れば風流な

洗ってもよごしても私の顔であり

不信なお残暑のごとく胸にあり

姑のままごとめいて盆三日

大阪市 那須 鎮彦

買って来た砂となじんで都会の子

雨のち晴凡人らしい悟り方

二枚舌次の手段を考える

幸せな女に買われて行く西瓜

竹原市 鈴木 かつ子

反省がこんなにきれいな星の空

抱き合って涙が命たしかめる

心にも欲しい小さな換気扇

八尾市 田中 紀美代

日帰りの家出で済んだ妻という

寝たふりをして和解の後思ふ

奥さんの疲れゴキブリ知っており

姫路市 大原 葉香

雷鳴一閃真夏の昼に活を入れ

ビジネスはきびしいネクタイ夏も締め

もう昨日の蟬でないかも鳴いており

松江市 梅本 登美也

親馬鹿を袋につめて母がくる

爪染めた女も混る安定所

俺を見よみよと雑草たくましく

島根県 飯塚 虎秋

そう言えば聖徳太子しわが増え

改築へ亡妻の匂いまだ残り

人柄を買われ門衛しています

高松市 溝 渕 美紀子

親心仕送り半分だけ返し

奥さんと呼ばれて怒る年令もすぎ

孝行をしてもないのに他人は褒め

羽曳野市 麻野 幽玄

良き声にあらねどうれし祝い唄

浜木綿の律義は鉢で咲いてみせ

軍籍は過去の汚点か原爆忌

和歌山市 桑原 道夫

裏返した枕の温みは何だろう

柱時計の振子に人間ぶら下がり

停電の闇安らかになってくる

弘前市 小山内 貞男

ウインドの値段財布と折りあわず

青空にザブトンを干すめでたい日

人間の都合でダルマ片目なり

東予市 小山 悠泉

もっと働けとねじ巻く税が来る

嬉しさと淋しさ巣立つ子を送り

賛成の拍手騰立て出来ている

西宮市 杉浦 婦美子

五十路へ実らぬ夢をもち歩き

又悔が背を打つ日なり蟬の鳴く

慎しみが一枚脱がす日の暑さ

尼崎市 中塚 喜甲

夢見せるどこまで亡母の苦勞性

よしあしにつけ も一人の僕がいる

月面遊泳に似てる孫の歩にあわせ

唐津市 岩下 照沖

汗出した甲斐あり稲の声を聞く
門からは幸せだけが見えている
出る釘になる役割を持ち込まれ

西宮市 井上 のぼる

逆転もフルスピードの資金繰り
思慕を断つ女静かに橋に佇つ
子を抱いて恋の写真も色褪せる

大阪市 文川 野生

盆踊り見様見真似で輪になって
下戸なのに今日は嬉しい日で飲める
共稼ぎなれど同権言わぬ妻

今治市 園部 正則

人間の自省がさせた自然食
お流れをもらいに行ってる嫌な奴
育てられ育てて終る人生譜

吹田市 藤原 世史春

戸締りはしてもせんでもよい暮らし
疲れきった金魚だけ掬われる
チャンネルを孫と争う不甲斐なさ

粕漬を味の秘伝ととももらい
値切ること趣味か女のなれ慣れし

岡山市 井上 柳五郎

夏季休暇都会のセンス着て戻り
星一つ消えて小さな望み断つ

宝塚市 吉田 笑女

栄転と言われ単身赴任する

山口県 高崎 雀声

退職の日を考える月給日

岸和田市 池田 露子

共演のあひるキョロキョロ何思う
アレグロのママのタクトがまた振られ

大阪市 欄 蘭

汗をして得た十円玉は光ってる
身構えて立てば蠅はよりつかず

尼崎市 大垣 たもつ

甲斐性なしの見本となって膝を抱く
養殖の味にも馴れた土用丑

羽曳野市 岩橋 双虎

もう知っていますと妻の眼が笑う
柳生路いっぶくさせる笠地藏

大阪市 野田 君枝

盆踊り見ている内に輪に入り

クーラーで手足がいたむ贅沢さ

羽咋市 三宅ろ亭

完全なアクセサリーに聖書持つ
夢や夢吾が人生がある限り

東大阪市 加藤千代子

言訳の便り十枚書き損こね
孫の唄昭和一ケタとも合わず

七尾市 松高秀峰

冷房で手足が疼く老の坂
おばあちゃん玩具買い過ぎ叱られる

岡山市 時末一灯

大物は知らぬ存ぜぬで通り
後輩の建てた病院へ入院し

寢屋川市 香川亜成

三日ばかり四十男の慌てよう
保険料惜しいと思うと倅せか

堺市 堀畑日々子

眠れないたかが指一本の痛み
思いつめた顔が車窓から動かない

新宮市 西尾功

手鏡に今日もはげます我がこころ
娘の時より縁談多い若い寡婦

大阪市 堀口欣一

帰省子へ灯台の灯の温かく
ひまわりの鞭打つように咲いてみせ

寢屋川市 江口度

甲子園さわやかに去る顔ばかり
熱戦の頭冷せと通り雨

鳥取市 勝山紫宏

先生を集めて修身おせたらか
庶民の怒りコップの中の嵐かも

堺市 栗本藤持

生ビールよばれて口止め頼まれる
病名は聞きたし宣告は恐し

八戸市 島田昭治

老の途も山吹の花咲いてあり
風無心染まるも知らず通り抜け

寢屋川市 福富隆子

通知表見るよに月給袋開け
方便の嘘だが胸を締めつける

名古屋市 大林曲ん手

しばらくしない服が私をくつろがせ
孫のくせ子のくせ嫁と笑い合い

富田林市 中村優

善人のその日その日を音たてず
雑草は土の良し悪しなぞ言わず

倉敷市 松井俊風

こおろぎが毛糸編む手を急がせる
孟蘭盆にハイこれまでの経で去に

働ける倅せ敬老会を避け
おぼろ月女どうしが物足らず

東大阪市 坂東若芽

障害者の野外活動に参加して

理性もう限界と云う語尾高し
また先を越されて暑中見舞くる

山百合よとわにその心その姿
うぐいすの声でキャンプへ朝が来る

八尾市 納史葉

組板の鯉大物ほど悪びれず
上を向いて大手振れるは庶民だけ

人妻の掟は掟 星を抱く

唐津市 桑原掬治

黒髪をばつさり未練断てるかな

豊中市 高橋古啓

特売へ亭主も列に立たされる
夏休み豆台風の孫がくる

靴底に歩き続けた悔いはない
火と共にやがて消えゆく黒髪よ

大和高田市 岸本豊平次

寝屋川市 柴田恵美子

人生の矢印塾へ通わせる
頂上の歓喜が崖道忘れさせ

夏ばてを少しずつ剥ぐ秋の雲
核家族の結末という年令間近か

東大阪市 崎山美子

尼崎市 駒村岳麓

バイブルにざん悔を誓う細い肩
裏金でやつとつかんだ回り椅子

島根県 松本文子

目に見えぬ課の仕事が社を救う
味噌汁の味が分れば五十坂

兵庫県 高橋近江

傷受けた心に優しネムの花
老母想うそれより深い愛にふれ

鮮やかに染め分け合飲の花佗びし

大阪市 文川一念

アルバイト労わる言葉探し出し

鳥取市 岸本無人

アイロンを押してる母の背にわびる
一本のマッチばこの妻なるや

妥協する余地を残した父の愛
人生相談解りきったことを聞き

八戸市 安田 紘

割箸が割れそこなった不吉感
待ち人が来ずコーヒーが酒となり

尾鷲市 中谷 利美

口かずで勝って抱擁力で負け
奥さんに言いつけますワには弱り

岸和田市 池田 香珠夫

じいちゃんと呼ばれ返事はしたものの
孫族の移動日本の夏休み

今治市 今井 松花

涼しさを喜ぶ柳 身を揺すり
ひっそりとした玄関に遊ぶ蟹

今治市 古野 伶人

お流れを飲み干す猪口にある野心
受験書の中に詩集のあるゆとり

倉敷市 藤原 健二

苦しんで悩んで捨てた恋を悔い
どうみても採算あわぬ釣に凝り

鳥取県 加藤 茶人

はち巻きを母はしっかり締めてやり

鳥根県 岩田 三和

満ちたりた顔になれないお人形

尾鷲市 渡辺 伊津志

五十肩治れば虫歯痛み出し

おのぼりを困らせている販売機

八尾市 土井 鹿蔵

脳細胞すっかり出して洗いたし

キリストのお蔭ひとこと妙なめに

岡山県 池田 半仙

老坂へ寂し重く踏むペダル

備前市 武内 雅堂

誘惑に負けそうダリヤ真盛り

大阪市 新川 貞祐

梅雨明けにおちよくなるような雨が降り

泉佐野市 大工 静子

洗髪束ねて秋の白い風

須賀川市 平 栗金太郎

うま過ぎる話に乗って留置場

大阪市 平井 露芳

CMを満載船渡御無事終り

橋本市 岩倉 天彦

ゆきがかり切った啖呵にきて困り

河内長野市 井上 喜醉

髪染めて昭和ひと桁隠してる

ふる里を憶う目覚めに花に佇ち

平社員の机はどこにでも置ける

親もとへ殊勝な手紙に毘がある

マヨネーズかけると祖母のしぶい顔

距離感を失いますね弾む声

花いじる母の姿が好きという

無智ゆえのわれ倅せか親らん忌

貰い手が無いのでは無し高望み

集金に行けば今から行く所

堀端で涼むしあわせ城下町

何もかも呑みこんでいる四十腹

羽島市 伊藤 静枝

樫原市 西本 保夫

亀岡市 森 和堂

岡山県 柳原 孝柳

倉敷市 高山 みどり

松江市 岡崎 雪美

松江市 黒目 大鳥

今治市 大本 バット

今治市 伊藤 一郎

今治市 真山 国彦

大阪市 藤崎 利治

七尾市 松高 秀峰

スタミナを気にせぬ母の里の味

猛暑にもめげず花卉の放つ色

乳くさい野望と純心こわされる

実習生馴れぬ手つきに客たまり

燈籠をここに欲しい庭造り

標準型と云う自動車の豪華すぎ

夫婦でもついていい嘘 悪い嘘

逆境へ父の拳を思い出す

ニコリと笑って不満は腹の中

盆栽とお茶老骨のうまが合い

秋の月虫の音失意を深くさせ

小学生ベル・バラを観た優越感

竹原市 大島 花炎

滋賀県 柚木 踏草

唐津市 岩崎 実

唐津市 田中 紫浪

唐津市 三浦 ひろ坊

唐津市 田口 虹汀

名古屋市 山谷 半藏

出雲市 高見 鏡堂

北九州市 三上 春雄

出雲市 板垣 夢醉

堺市 檀野 千世子

水煙抄

秀句鑑賞

前月号から

水粉千翁

一年ぶりの水煙抄の鑑賞である。といって、毎月鑑賞させていただいている。

水煙抄の鑑賞は、第一次選者の推せん作品の中から、特に鑑賞価値のある作品を求めるというものであるが、これも指名された側では、選句することに等しいものである。

今回の集句で、特に感じたことは、一年前の私が担当した時の作品と感じが相当違っていることである。作者の顔触れには、大した変りはないので、これは第一次選者の交替が原因かと思つた。その訳は第一次選者とはそんな安っぽい選者ではないからである。そうすると作者のテクニクのうまさかなとも思つてみた。それは第一次選者への当て込みではないかと、失礼な憶測を試みたからである。いやいやそんなことは全然ない。そして、その揚句、やはり作者がうまいのだなということに結着したのである。

最近、大会などで選者が、『私好みの選をした』。『盲選を許されたい』。などという実に不都合極まる発言が少なくなった。これは選者の一歩前進であつて、よろこばしいことである。

『作句は個性を貫ぬく』。『選句は視野広く求める』。のが鉄則であるが、選者は鉄則を貫ぬくための、勉強をおこたつてはならない。などと大見得を切つてゐる次第である。そんなことより早く鑑賞をせよとの声も出て来そうであるが、実はこれが鑑賞のための大切なことなのだ、私が思つてゐるので、何卒お許しをねがひたいのである。そこで一年前のと違うという鑑賞句を並べて見ることにする。

思ひ出を拾ひ上げつつ里の道 大工 静子
裏切りよもう浅い瀬は渡れまい 杉浦婦美子

二句共説明なくしてよく判る、よい句である。特に二番目の句には、若干の表現技巧があつて、仲々鑑賞に価するおもしろい句である。『浅い瀬』は逆表現のうまさであらう。

句読点母の小言に見当らず 原田琲珈俚
表現からユーモアを感じる佳句である。
梅雨晴れ間泣きに來た娘の忘れ傘 岩下 照沖

この句は、私の頭の隅のどこかに置き忘れて來たような類想感を覚えてゐるのである。それが私のただの錯覚に過ぎぬものであるとするならば、この句は秀句であり、鑑賞の一

級品である。

さすらい人に同じ笑顔の石地藏 小谷 葉子
一年前と變つてゐるという作品群の中でのその代表作である。この作者の作品は、毎回玩味してゐるので、特にその感を深うしてゐるのである。一連の作品が皆そうであるので二度びつくりしてゐるのである。

世をすねた目が青空へ突き當り 有働 芳仙
この作者は、元不朽洞会員・川柳塔社同人として注目の人である。この句には、一見暗さを感じ乍らも、やがて明るさへ展開しようとする表現が、平易なことばで句の奥行を展開してゐり、やはり非凡であり、たしかに傑出してゐる作家だと思ふ。

少女の胸に銀紙の鶴飛べずいる 桑原 道夫
金紙でなく、銀紙に少女の感傷がこめられており、『飛べずいる』に、更に少女のやるせない心のいたみがあるのである。

溜め息を捨てて見給え花の道 納 史葉
心象を、しかもひとり言の形で云い聞かせてゐる叙法に、新しく、しかも中庸的な川柳を発見する句である。

この二句が、実は私の好きな句である。と云えば、『お前も私好みではないか』。と叱られそうであるが、これは私好みではないと声を大にして訴へたいのである。

今日から明日への川柳こそ、こうあるべきだと私の見を貫ぬきたいからである。

このほか目に止まつた句に、
追ひ風のペースに自分を見失ひ 岸本豊平次
があつた。

百人一首と川柳

(28)

富士野鞍馬

八七 寂蓮法師

じやくれん

むら雨の露もまだひぬまきの葉に
霧立ちのぼるあきのゆふぐれ

(新古今集)

この歌と、定家の

見渡せば花も紅葉もなかりけり

浦の苔屋の秋の夕暮

と西行の

心なき身にも哀れは知られけり

鴨立つ沢の秋の夕暮

とを併せて「三夕」(さんせき)という。

それを川柳は、

同じ刻限に三人淋しがり

隨筆(二六三)

苔屋よりまきより鴨は人が知り

戸をたてる前三夕の払ひ物

(三二七)

木綿(二四三)

三夕の外の夕ぐれ中の町

(五三四)

などと詠んでいる。

寂蓮は、俗名を藤原定長といい、僧俊海の

子で、叔父俊成(八三)の養子となり官に仕

えたが、のち俊成に成家、定家(九七)が生

れたので、退いて出家し、名を寂蓮と改めた。

そして建仁二年(一一〇二)になくなってい

る。定家の従兄である。

八八 皇嘉門院別当

難波江の芦のかりねのひとよゆえ

みをつくしてや恋ひ渡るべき

(千載集)

この歌は、法性寺入道が右大臣だった時、
その家で催された歌合に、「豚の宿で逢った
恋」という心を詠んだのである。

作者の「別当」は、大皇太后宮亮俊隆の娘
と伝えられているだけで、その氏性も生涯も
わからない。その仕えた皇嘉門院というのは
崇徳天皇の中宮である。

絵が無いと男女の知れぬ百人一首

(八四)

別当とあるので、男か女かわかりにくい。

右大弁皇嘉門院守護の臣 巨眼(二二〇四)

皇嘉門から出たもふは大弁

集馬(九二三五)

小倉山皇嘉の脇に萩の尿 帆布(二三四二)

と、「後架」の地口にかけた戯作もある。二

つ前は西行である。

八九 式子内親王

しきし

玉の緒よ絶えなば絶えね長らへば

しのぶる事のよわりもどする

(新古今集)

式子内親王は、後白河第三皇女で、平治元
年(一一五九)から十一年間、賀茂神社の斎

院となつておられたが、嘉応元年（一一六九）に病氣の理由でやめられた。その後、剃髪して承如法と称され、建仁元年（一二〇一）になくなられた。家集に、「式子内親王集」がある。

右の歌は「忍ぶ恋」を詠まれたのであるから、

百人一首末へ行くほど身もんだい

（拾四二）

と詠んでいる。

謡曲「式子内親王」に、藤原定家（九七）

と契りがあつたと作られ、川柳も

御硯へ時雨の通ふ小倉山 和水（七七三）

御硯へしぐれのかかる小倉山

海月（八二二）

と詠んでいる。

また文句取りに

玉の緒またへなばたへぬ鮫がすぎ

祖山（二四〇九）

がある。

九〇

殷富門院大輔

見せばやな雄島の海士の袖だにも

ぬれにぞ濡れじ色はかわらず

（千載集）

大輔の名はわからないが、藤原信成の娘で、後白河の皇女亮子内親王殷富門院に仕えていた女房である。女流歌人として名を知られ、勅撰集にも多くの作がとられてある。

右の歌の文句取りに

ぬれにぞぬれて頼んましよ

秋風（宮初三）

ぬれにぞぬれて蒼朮や蒼朮や

五英（傍初一）

―梅雨季に湿気除薬

九一 後京極摂政太政大臣

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしうに

ころも片敷きひとりかも寝む

（新古今集）

法性寺いい棒組は後京極

祖山（二四〇一）

百人中、法性寺と、この後京極とが一番長

い名なので、「棒組」と洒落ている。

虫沓霜夜にないて集に入

三枝（三二一六）

百へ入れたのは薺きりなどでなし

柳雨（二七四）

薺きりは、きりぎりすに似ているが、やか

ましく竹薺などで鳴く虫で、右の歌の「きり

ぎりす」は、今いう「コオロギ」のことである。

後京極源氏にもれた虫を聞き

雨鰯（二八三）

「源氏物語」に、螢や鈴虫の巻はあるが、

きりぎりすはない。

後京極というのは、藤原良経のことである。

藤原兼実の子で、忠通（七六）の孫にあ

たる。官に仕えてから昇進が早く、建久六年

（一一九〇）に内大臣、正治元年（一一九

九）に右大臣、建仁二年（一二〇二）に摂

政、元久元年（一二〇四）には三十六才で太

政大臣となった。その翌々建永元年（一二〇

六）三月七日の夜中に急逝した。これは暗殺

とも伝えられている。

良経は、才子で諸芸に通じ、特に書をよく

し「後京極様」という流祖である。歌は定家

に習ったようである。

右の歌にかけて

きりぎりす鳴くよりはやく嫁はとり

谷水（四三二〇）

嫁の手で取るのは飛ばぬきりぎりす

柳雨（四九一七）

きりぎりす啼くとおさえる歌かるた

（テイ二）

カルタ取りが詠まれている。

愛染帖

正本水客選

男の匂い外の匂いはみんな消す
 声高く極悪人にもなり切れず
 和歌山市 野村太茂津
 亡母を追う廻り灯籠の輪のなかに
 兄嫁と膝つき合やす母の死後
 八尾市 高橋 夕花
 干からびたみみずは蟻も餌にせず
 逃げそうで逃げない蛙を見ていたり
 尼崎市 黒川 紫香
 校庭にボール卒業近づけり
 少年が一人になった夏の午後
 和歌山市 桑原 道夫
 過ぎたるは及ばざりけり今太閤
 栄華栄達かくて頭を丸め
 青森市 工藤 甲吉
 ホコリっぱい人にどんなネクタイ贈ろうか
 少し音痴のあなたの唄も聞きなれる
 柏原市 小谷 葉子
 とんばすいすい初孫の寝顔見に

仕合せはむっくり朝を起さくる

島根県

堀江 芳子

大口をあけて咲いたムツゴロウ

空缶の色鮮かに夕映える

豊中市

戸田 古方

蚯蚓ひく小蟻の群へしやがみ込み
 茶柱の立たぬ玉露を飲む生活

高槻市

若柳 潮花

遍路道の秋は浦戸の蛸売り

冗談にしては肘鉄きつすぎる

今治市

原田 一風

カーテンに風を誘った若いママ
 塵一つない部屋で大きな声も出ず

羽曳野市

岩橋 双虎

バラ垣の高さで女の城守る

倉敷市

小幡 里風

逃げ切った蟹に鉄が重たくて

東大阪市

竹中 肖二

梢より低い下紵の冬の山

今治市

大本バット

戦さなど知らぬ男のオートバイ

貝塚市

野坂つき子

エンゼルの羽根が重たい太りすぎ

大阪市

花村

まだ続くお世辞 造花を見ていたり

島根県

錦織 文子

参道は脱経に負けぬ蟬時雨

平田市

久家代仕男

雲間より竜の手毬か盆の月

大阪市

川口 弘生

陽を拝み地藏を拝む朝はよし

和歌山市

沢山 福水

蓮の花開かぬままに精霊会

京都市

松川 杜的

思い出が垂直に降る月天心

竹原市

三宅 不朽

目に見えぬつかい棒にもなる私

大阪市

神夏磯道子

決心に待ったをかけるも自分なり

京都市

都倉 求芽

誘い球投げて本心確かめる

東予市

小山 悠泉

いつしかに父母の通った路に付つ

島根県

飯塚 虎秋

蟻の道六法全書などいらず

和歌山市

津田 与史

不満ではないがと老人前おきし

出雲市

高見 鐘堂

手の切れる千円札で煙草買う

鳥取市

勝山 紫宏

耳搔きがあくのを妻が待っている

今治市

真山 国彦

抽斗の一つは誰あれにも見せぬ

東京都

山根 白星

堤防は流れと話すのを拒み

伊丹市

樫谷 漫柳

スポンジのような男で憎まれず

宝塚市

小畠 無聖

一袋もらって夏の暇を噛む

島根県

堀江 正朗

出来の良い嫁で話題の外に居る

羽曳野市

麻野 幽玄

忘れ行きし夫のハンカチ一日持つ

唐津市

岩下 照神

うそのない素朴な友の国詠り

倉吉市

奥谷 弘朗

人臭く生きて中年のつまずき

富田林市

岩田 美代

女体いま火柱となり曼珠沙華

備前市

武内 雅堂

真夜中に銭の音してかたすのむ

堺市

高橋千万子

育児へ口はさみ老人嫌われる

宝塚市

吉田 笑女

切り株の蔭でも苔は生きている

今治市

古野 伶人

交通安全 旗は地蔵に番をさせ

今治市

伊藤 一郎

夕顔の憂いを白く濡れている

倉敷市

水粉 千翁

帰化草のふる里建国二〇〇年

岡山県

出原 敬一

お互いに落ち目古傷には触れず

岡山県

直原七面山

病院は尾道町よ町も消え(原爆忌)

倉敷市

高山みどり

螢かご、かざせば寄って来る螢

岸和田市

池田 露子

いら立ちを尚かき立てる蠅しぐれ

東大阪市

竹中 綾女

虹立ちてしばし華やぐ一人旅

堺市

伏見 茂美

嘘の嫌いな体温計を振り続け

滋賀県

柚木 踏草

左遷した年の暑さは覚えてず

八尾市

宮西 弥生

月も風も暦の立秋に素直

大阪市

宮尾あいき

古漬をおいしく婿は食べて呉れ

貝塚市

行天 千代

蟻しぐれ肩に寺院の門を出る

松江市

岡崎 雪美

一日を大切にする函をみがき

泉大津市

村上 春巳

格安のうどんて済ます研究会

唐津市

新潟回天子

泣き疲れ叱り疲れて母子昼寝

岸和田市

池田香珠夫

重そうに絆ひきずるのは中年

八尾市

大路 美幸

花嫁のトイレは母が付いて行き

今治市

今井 松花

偶像が崩れ人間らしくなり

和歌山市

西山 幸

故里は鳥が鳴くだけよいと言う

山口県

高崎 雀声

神様の前で汚れた手を洗う

豊中市

高橋 古啓

寝ころんで畳の感触確める

大阪市

黒田 真砂

頼んでも時間は私を置いて行く

大阪市

藤田頂留子

セミ競う庭に公害菌も立たず

羽咋市

三宅 ろ亭

早稲がもう穂ばらみしてる 蟬時雨

松江市

梅本登美也

交番の一輪差しの花萎れ

大阪市

欄 蘭

朝顔のもっと伸びたい志満まれ

生駒市

草深 醉升

うなぎやの前うなぎ屋の風匂う

唐津市

松垣 岩光

風鈴の余韻慕情となる夜更け

和歌山市

若宮 武雄

目立つまい出しやばるまいとする人

尾鷲市

渡辺伊津志

男ではない老夫へもつぜらし

大阪市

新川 貞祐

借金だけ残せし父だが恋し

八戸市

島田 昭治

川柳塔社主催・篠山支部共催

篠山デカンショ祭吟行

入選句抄

(整理・香川静々)

風もなく丹波盆地の蒸し暑く
暑い日の続けと祈る稲作り
エアコンで暑さ月賦と入れ替り
熊ぜみが暑さを倍にして返し
むし暑い寝ごさから男の影がある
暑うおまんあから井池動き出す
明日を見る蟻は暑さに負けていず
モーニング義理がからんだ暑さなり
夏やせのあばらに西日と蟬の声
叱られに來て待たされている暑さ
サウナ風呂ビルマの戦さ偲ぶ幸
言論の自由ばかりがはびこって
寢床につきやとと自由の我になり
血圧は順調自由な趣味愛す
自由になりなさいと旦那に捨てられる
裸から先の自由は神が知り
旅婦り見つけた我家にある自由
夏の日には自由ない方がシャンとする
自作農自由に取れる茄子の色
出張の一夜自由を持てあまし

白 峯
和 人
珠 玉
久 子
静 馬
重 人
薰 風
越 山
柳 志
太 茂
津 枝
や よ
雀 枝
百 合
子
漫 柳
近 江
老 萩
春 香
笑 女



来る出来ない原因を具体的に話され、一同それぞれの感懷で傾聴した。入選句発表の呼名も元氣よく、復誦記名係に現地関係は越山氏が大阪関係は鬼遊が夫々担当、大会の雰囲気はしばし時間を忘れさせる。

懇親宴はそこそこに、吟行の本命は夜のデカンショ踊りへ流れ込む。宿の浴衣に下駄履きでは、どう見ても踊れる様ではないが、篠山支部が当夜のためにわざわざ造ってくれた大阪川柳塔の行燈(カッパ)を先頭に、心うきうきと踊りの輪に駆け込んでゆく、踊るほどに夢中になり旅のわが身も忘れ去る。宿の門限時間のため踊りの輪に心を残しながら賑やかな篠山の町並を宿舎へ引き上げる。

翌日、篠山古陶館を観る。小西無鬼氏に見送られ、一行の車は篠山盆地の中を走り、籠の坊温泉に着く。山女の塩焼、鯉の洗いに一同満足し旅の疲れを慰やす。

最終便のバスに乗り遅れ、頼み回ったマイクロバスに助けられたのもこの旅の想い出である。

(鬼遊記)

篠山吟行はこれが二度目である。八月十七日九時五十分大阪発急行「だいせん一号」が篠山口駅に着いたのは十一時。駅にはボーイスカウト姿の小西無鬼氏が出迎えて下さる。タクシー五台を連ねて国民宿舎さきやま荘に着く。句会場になる大広間の入口には遠山可住、北山越山両氏が受付準備を完了して大阪勢を迎えてくれる。大阪二十五名、篠山二十八名、出席者総勢五十三名の盛会となる。小西無鬼氏の歓迎挨拶に続き、若本多久志氏の柳話は、路郎先生の想い出から、作品の出

書評

橘 高 薫 風

人間模様

長谷川千峰作品集「人間模様」が、人間座新書として八月二十五日発行になった。

私は元來句帖というものを持ったことがありません。句会があれば句を作り、出句を求められたら出句する。ただそれだけの「ものぐさ千峰」の句を何処からか探し出して、全句とは言えないが、句帖のようなものを作ってくれた人が現われました。それは人間座の中野アキオさんです。「序にかえて」で著者はこう言っている。その中から自選した百十五句が掲載されているのだが、それらは皆句会吟、つまり題詠であるのが特長だ。

人に叛かれ猫にそむかれ老駝死す

記事二行刺されるまでの二十年

流し雛もとどり切れて沈みゆく

薬飲み酒呑み守るエゴイスト

男の耳崩壊音は永劫に

地球儀をくるりあの男も消えた

滅ぶ日が来るぞと赤い月のぼる

来し方は忘れよ雪のえびす橋

薄物に透けば悪女の肌となる

墓と語る女の髪に波が重なる
蟻の列胸蝕ばまれゆく日々を
この恋も音して割れたくるみ割り

パントマイムこのやり切れぬ動物
もののふの埴輪はかなし幼な顔
エレベーターぐんぐん窺に落ちてゆく

この様に作品を並べて見ると、豊富な語彙を駆使した句は、句会吟とは思えぬ程に、それぞれ、ドラマがあり、鮮烈に訴えてくるものを持っている。神宮皇学館を卒業して、現在、阿倍王子神社宮司、大阪府神社庁副庁長の職にある著者は多忙で作句から長らく遠去

かつておられる様子だが、出版記念の会で、力量のある作家が、作句を休むことはいけな

いことで、川柳界のために今後とも大いに

氣を吐いて欲しいとお願ひしたものである。

第二の作品集へと精進して戴きたいと思う

のは私一人ではあるまい。頒価二百五十円、

送料六十円。発行所 〒546 大阪市東住吉区桑

津町六の五九中野アキオ方、番傘人間座。

はたち

宇佐美和子著の川柳作品集「はたち」が八

月二十日発行になった。著者は神戸女子大に

在学の新進で、本社同人川竹松風氏の主宰す

る「川柳高知」誌上で活躍しておられる。還

暦、古稀の句集と違つて二十歳を迎えた記念

に残したいと出版した作品集は見るからに純

粋で心楽しい。作品集は、コスモスの風、道しるべのない

徑、ちぎれ雲にのつて、うつむいた瞳、各駅

停車の青春の五章から成る。うつむいた瞳の章には次のような解説がつ

いている。私が「女」ということばから連想するもの

「秋の草、指、黒髪……たくさんあります。けれども二十歳そこそこ、いまだにオーバ

ーオールを着て喜んでいるような女のオビ、細やかな女の心をうたうことはどうもむずか

しいようです。ただ少女から乙女へ、乙女から女へと少しづつ変っていくそのようすを思

った時、私はふと一目をふせた。そのうつむいた瞳を感じたのです。

川柳歴わずか二年の作者の句は、自己のありのままを詠っていて、まるで日記の断片を垣間見る思いがする。殊に、恋の句に優れた

作品が多いのは氣取りのない純真さが心を打つからだろう。

あなたの瞳に私がうつっている五月

あの人を読んでる本を買いに行く

手袋のない手を大きな手が包み

恋人の写真にあつかんべえをする

誤字訂正されて戻ったラブレター

彼の顔だけは眼鏡なしで見える

美しくなる友秘密があるのか

青春はひとりばつちの紙芝居

著者の高校時代の師であつた北村泰章氏は、序で「彼女は卒業後、郷里の高校で教鞭をとるのが夢であるという。そして勤務校で川柳愛好会を作りたいという」と書いておられる。何卒、至心を貫いて戴きたい。



高橋操子句碑建立

—ちっぽけな善意でもよし心満つ—

川柳塔社参事、高橋操子氏は麻生路郎門下で路郎先生ご在世中は川柳塔の前身「川柳雑誌」社の不朽洞会員として活躍、昭和二十四年四月に岸和田川柳会を創立、現在川柳塔社参事として活躍されている事は周知の通りであります。

また現在岸和田市文化協会副会長として協会創立以来当市の文化向上に寄与せられ特に昭和四十一年社会教育功労表彰をうけられるなど、あわせ句作の精進に励んで居られます事は、私のもっとも欽びとするところであります。(後略)

高橋操子句碑建立委員会

委員長 西出仁三郎

建立地 岸和田市 久米田寺境内

建立時期 昭和五十一年十一月二十三日

協賛金 金壱千円(句主の御意志により

お一人壱千円に限らせて頂きます

送金先 植山武助
〒596 岸和田市上町七の三六

(振替口座・大阪一九六七)

申込期日 昭和五十一年九月十日

(前略) 作家高橋操子氏は四十有余年の句作歴史を飾るにふさわしい句碑の建立に賛意を表し、発起人を設立し協賛するものであります。

発起人

麻生路郎夫人

岸和田市長

岸和田市教育長

岸和田市文化協会長

川柳塔社主幹

友人代表 家

麻生 霞乃

原 昇

荒木 和雄

西出 仁三郎

中島 生々庵

不二田 一三夫

玉井 恒清

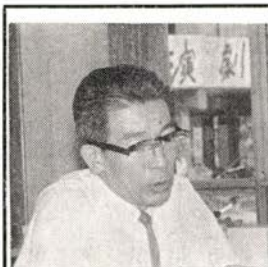
小倉株式会社社長 小倉 十吾

実行委員

青木三碧・安宅川豊・板尾岳人・榎本聡夢
大矢十郎・太田小栄・岡橋寛介・梶川雄次
郎・葛城伊三郎・河内天笑・川村好郎・角
谷浩青・上林加仙・菊沢小松園・佐々木莫
平・庄司佳生・神藤歌子・新家有雅・須田
安治・杉原芳子・高木武治・垂井千寿子・
外山瓢人・富木静芳・内藤きさ子・中田た
つを・中村民治郎・中野三四郎・西尾菜・
西田柳安子・野村太茂津・林春栄・林裕子
深日白光子・福浦勝晴・満田雪峰・八木摩
太郎・歳年甫・雪本珠子・吉村静一郎・吉
村南風郎・吉村たけし・若本多久志・渡辺
千恵子・高橋幸代
句碑建立実行委員代表

植山 武助

(高橋操子句碑建立記念句会は別項参照)



故森田茗人君を悼む

河村 日満

森田茗人先生を悼む

加藤 貞山

茗人、森田源之助（浄源院能誓茗人居士）
君六十二歳が

まだせねばならぬことあり 死をおそれ
の辞世句を残して、八月二十七日午前十一
時五十五分口腔底ガンのため、米子の鳥大医
学部付属病院で、息を引きとってしまった。
去年三月ごろから「どうも顎の辺りが氣持
悪くてね。」と云っていたが、その頃から顎
は徐徐に拡がりはじめていたらしい。「早い
診断を」と、二、三人の達人からすすめられて
いたようだが、九月六、七日に鳥取で開催さ
れる国鉄川柳連盟大会が終るまではと、齒を
喰いしばって我慢していたらしい。体に暇が
できてすぐ、医者に診てもらったところ、米
子の鳥大医学部の方がよからう、ということ
で米子に行った。その日そのまま入院手術と
なってしまった。

川柳は朝鮮で、故大島濤明氏に師事したと
か。戦後引揚げて鳥取川柳会に入会、今日に
至っているが、その間日本海新聞、サンケイ
新聞鳥取版の川柳欄を担当、多くの川柳人

育てあげている。辞世句でもわかるように、
本人にもまだまだ、したい事があつたようだ
し、私達もまだまだしてもらいたいことが、
沢山あつたのにと惜しまれてならない。
家庭は二人の男の子に恵まれているが、長
男が勤務の都合で東京住まい。そのため現住
所では華子夫人、次男の熊生君との三人暮し
だった。
ここに茗人君の遺句を掲げて、その死を悼
み謹んで冥福を祈りたい。

遺句

風の糸のばしてかぜに逆らわず
どこにいてもふるさとはある風かおり
ひと粒の米豊かになるまる味もつ
正直に鳴る目覚ましをけむたがり
シャボン玉子の倅せをこむすまい
風紋の変化砂丘もいのちもつ
掃除婦に詩ある廊下のガラスみがく

弔吟

手ほどきにゆく君 とどめようもなく

日満

川柳一家の華子夫人と、ご子息次男熊生君
とが看病されていて、最後の日の前夜熊生君
にメモをさせられたのが辞世の句になろうと
は！

まだせねばならぬ事あり死を怖れ 茗人
又茗人さんの今は亡き居室に
登竜の縁起あやかる賀状かく 茗人

力強き筆跡が床に光を放っている、この色紙
が恐らく絶筆と熊生君は語っている。告別式
は八月二十九日午後一時より鳥取市寺町の慶
安寺でしめやかに営まれ鳥取県下の川柳人
を始め、文化団体、県警察関係の方々参列の上
に弔辞は先ず鳥取川柳会代表河村日満氏、市
文化団体代表松本稔葉子氏、町内会代表、鳥
取歌和会代表、うみなり川柳会代表小林由多
香氏、鳥取文芸懇話会代表山本嘉将氏、弔電
は川柳塔始め各地の川柳会の皆さんが沢山寄
せられ、花輪が新築の茗人荘を彩どつてさな
がら鳥取で始めての川柳葬の感を強くす。以
上の名司会を両川洋々君がされて一同の感銘
を受け目頭の熱くなるを覚えた。遺霊はふる
里が倉吉出身なので句碑を建立された、倉吉
市新町誓願寺の境内にある

茗人

風の糸のばして風に逆らわず
のある寺へ忌明けと共に行く事となってい
る。昨年自宅を新築されて鳥取相生町に茗人

莊と名付け川柳道場として句会を開き若い人達の前途に光明をみい出していた矢先のご逝去で惜みても尚あまりある。茗人さんは大正三年六月二十四日生れで学生時代から川柳を嗜み僕と違つて永い川柳の勉強者であり若い人達にたゆまず指導して来た人だった。

特にこの一年間は病床にありながら、自分の身をすり減らしてでも柳壇の高揚を計ろうと最後まで添削をするなど懸命であった、指導に熱が入ると自分のうん蓄を傾けつ放しに深夜までも話に華の咲く事しばしばであった朝鮮京城公立商業学校を卒業後、戦中は朝鮮鴨緑江水力発電会社を勤務、昭和二十五年に鳥取県警本部事務官として勤務、四十九年定年退職をされた、この間三十三年から日本海柳壇の選者、三十八年に創立された日本海川柳友の会「現在うみなり川柳会」の会長を務めた五十年に発足した県川柳作家協議会の初代会長となる、著書に川柳解説書「川柳手帳うみなり」四十一年刊行が残されている。森田茗人さんとの出会いには僕が還暦の時に川柳を始め十五年が夢の如くに過ぎ去り、今になって思えばあの時無理をされない様にもっと強く言ったら良かったではないかとも思うに連れて残念でしょうがない、唯々漸停に耐えないばかりである。然しこんな思い出もあつた大阪の店に常駐をして居た頃に明日は鳥取の句会に出席すると決めて夜行の車の中で作句に馳せ参じた時は手を取らんばかりに喜んで下さった。思ひ出は大切にしまつて置きたいと思う。浄土の池の蓮の上でゆっくり

休んでいて下さい。

弔 吟

合 掌

手ほどきにゆく君とどめようもなし 日 満
まだ酒がたりない顔で祀られる 由多香
今も残る師のみ手の冷え掌を合わす 千 代
風の句の跡これからを碑に遺り 豊 生
惜まれて説経の庭に萩が揺れ 貞 山

五つの味

八 木 千 代

まだせねばならぬことあり死をおそれ

二度目の手術の経過もよく、さっぱりした顔で「辞世を作ったのに、要らなくなった」と、笑いかけられた早春の病室を思い出します。その頃、母も同じ病院の、窓まで向き合つた室に入院していて、お目にかかれる機会も多かった故か、発音が難しくなられてからも、先生の御言葉の意味は、よく判るようになって居ました。みどりの季節がすぎ、病室の冷房も、暑さに負けてしまふような頃「治つて下さい。先生」と言う私に、軽く手をあげられたのが、「うんうん」と言う意味なのに、すこし横にゆれたように見え、不吉な予感とも取れ、あの頃から、気力で否定されながら、すでに死と対面され覚悟をして居られたに違いのないと思われまふ。その頃、色紙代りに、両用紙に「甘辛酸渋苦」と独特の筆使いで書いて下さった。私にとっては、絶筆と

なつてしまつた大切な両用紙。川柳即信仰と言ひ切られ、川柳を深く愛し、川柳のいのちを伝え、育てることを使命として生きて来られた先生は、自身の生きざまにもきびしく、私達にも、作句以前の姿勢を教えるようなさつたのに、不肖だった私でした。

真夏になつてからの闘病は、見るめもつらく、鎮痛剤と点滴だけのベッドで、ペンを離さず、柳誌をひろげ、新聞柳壇の選句をされるすがたは、求道者の修羅を見るようで、見舞の帰路は、四人とも（花子、瑞枝、越子さん達）黙つたまま、胸のつまるような思いで、歩いたものでした。絶えることのない苦痛、舌から始まつて、しだいに顔面を蝕んだ癌細胞とのたたかひに耐えた極みの、死顔の隠やかさ、透明な安らかさは、短かい命運ながら、充実した使命感をバックに、業苦から解脱され、立命の彼岸へ至られたに違いのない心の昇華が、そのまま現れたような仏相は手厚い看護に明け暮れた、奥様や御子息にとって、生涯の支柱となつて残られるであろうと、思われたことでした。

大病病院の霊安室で、御子息から臨終の様子をききながら、涙でいっぱい、その仏相すら見えぬようになり、気も遠くなりかけた私の胸の底を、川柳の五味という意味で頂いた、いつかの「甘辛酸渋苦」が、人生の味だと、気付かせるように、くり返してくり返して、流れて居ました。

弔 句

今も残る師のみ手の冷え掌を合わす 千 代

新 刊

松本忠三選

新刊書あら筋だけを立説し
新刊書買つて知性へ背伸びする
新刊を飾つたままで足りる妻
新刊のヌードが哀し売れ残り
投稿をして新刊を待ちわびる
新刊の出る頃すでに時流れ
再版中とすれば新刊なお売れる
全集の新刊社運賭けている
立読みの新刊要点だけめくり
前評判ほどは人気のない新刊
新刊の案内も減る老の家
新刊も買うて最初の子は育て
著者だけの名前で買った新刊書
新刊書並べて書齋にある虚栄
新刊の目次一瞥時間待ち
意表つて新刊世界の目を集め
懐然として新刊に負けている
豪華本予約をとつてから出版
新刊の売れゆき書評に従わず
ひさびさの新刊入荷貸本屋
小康を得て新刊を買いにやり
新刊の句集を後輩贈つて来

掬治 昌道 重朗 悠人 秀峰 通風 伶人 思月 春日 貞祐 木魚 雀声 軒太 藤持 白水 白生 弘童 翁光 岩身 素郎 七面山

選 手

西岡洛醉選

病人の見舞新刊買つていき
新刊がはいって書棚位置をかえ
評判の新刊なのに悔残る
新刊のよろこび耳が切れていず

天 地 人

新刊が出たと本屋に当てにされ
新刊がもう棚にある古本屋
新刊に遠い暮しの主婦でいる

道子 木魚 一風 豊生 国彦 右近 雅風 宵明 宵明 紫宏

選手団拍手の波に迎えられ
新記録いつも選手は追われてる
チューインガムを吐き捨て打撃王
豆選手ミットはお年玉で買い
批判にも耐える選手で名を残し
ウルトラC選手が見せる神の技

七面山 勝一 照沖 虹汀 秀峰 和堂

根性の正選手と云う鋭い目
老いてなお栄光語る金メダル
声援と期待選手の背に重い
それだけの色で五輪の勢揃い
一と筋に打込み今日の新記録
勝つ迄は選手婚期を犠牲にし
選手団母国を担う顔でゆき
国旗背に涙でぬらす表彰台
十二年目日本の魔女がよみがえり
表彰台一位は日本の顔
モンテリオール日本選手の意地をみせ
名選手だった誇りは生きており
惜敗の選手に拍手なりやまず
グランドの雄姿職場でよくわむり
甲子園夢が実ったナインの和
選手村男世帯のひげがのび
歓声が選手に孤独忘れさせ
精魂の尽きた選手へゴング鳴る
選手権世界の壁はまだ厚し
栄光をかけて選手の秒刻む
優勝した選手へ駅がせますぎる
勝つ事に選手の意地は燃えつくし
選手宜誓うわずる声の晴れやかさ
女より選手へ賭ける黒い肌
選手村お国料理ではげまされ
のど自慢音痴代表居て楽し

住

グランドの砂が選手の汗を吸う
人並みの青春捨てた金メダル
欲捨てた今日の選手の技が冴え
人生の選手よババよ頑張つて

肖二 翁童 重人 バット 弘生 優 本蔭家 思月 国彦 漫柳 翁童 松花 亭 君枝 伊津志 満津子 春雄 悠泉 代仕男 伶人 紘 登美也 伊津志 思月 喜代子 岩光 満津子 香珠夫

ひと走る選手生命の燃えるまま 右近
 勲章のような選手の黒い肌 重人
 フラッシュへ殊勲選手の齒が白い 岩光
 天 地
 敗将の夕陽に光る奮起の目 静枝
 軸
 根性の選手に不滅の金字塔

暴力追放

恒松町紅選

根気良く暴力追放キャンペーン 秀峰
 暴力追放やぐさ映画が儲かる世 一郎
 暴力追放空念仏とあきらめる 国彦
 返礼の恐さへ暴力はびこらせ 軒太
 暴力追放勇気出したのがのされ 松花
 暴力へ町内スクラム組んで立ち 思月
 暴力へからだをかける老刑事 どんたく
 暴力追放家毎のピラ細せたまま 藤持
 暴力へ一矢むくいる記者のペン 優風
 暴力追放たれ幕だけが威勢よし 貞祐
 かけ声の暴力追放大魚逃げ 正則
 左にも右にも暴力ある怖さ 伊津志
 これだけに命をかけて刑事老い

スクラムが遂に暴力追放し 敏人
 暴力をしっかりと聞いた一一〇番 重人
 暴力追放余所目にかくざ市街戦 弘風
 スローガンだけで暴力根が切れず 虹朗
 大衆の奇智に暴力封じられ 白丁
 飲食店暴力追放すみに見せ 夢酔
 暴力追放立看板が褪せている 絃月
 追放の綱を暴力くぐり逃げ 悠泉
 暴力追放明る明日の街づくり 天彦
 過疎村も暴力追放のピラを貼り 春雄
 暴力の追放笑う保釈金 香珠
 暴力を追放どこかゆ着する 木魚
 暴力追放刑務所が狭すぎる 度翁
 暴力追放ボスがだまった生徒会 肖童
 暴力追放警察官が抱き込まれ 双二
 暴力追放商店街の気が合わず 福水
 押し売りへ防犯ベルが役に立ち 佳

暴力追放あざける様に弾丸が飛び 本蔭樺
 暴力のない楽園に海の碧 宵明
 暴力追放小さな勇気貸してくれ 道子
 暴力追放へ隣組長本気なり 七面山
 暴力追放してにぎわった夏祭り 素身郎
 暴力追放文字だけ赤く書く 登美也
 暴力追放鈴をつけるは誰がする 岩光
 天 地

第十回 東大阪市文化祭参加

第四回 川柳大会

一、日時 昭和五十一年十月十日(体育の日)正午開場、出句べ切一時半

一、会場 東大阪市中央公民館二階 祝聴 寛教室

一、柳話 (近鉄永和駅すぐ南、市民会館内) 「小児科医の漫談」

一、兼題及選者(選者・雅号イロハ順) 中島生々庵氏 川柳塔社・主幹

声 暇 西村 芳川氏

寺 西田 柳宏子氏

似る 片岡 つとむ氏

鳩尾(ミゾオチ) 菊沢 小松園氏

愛 墨 作 二郎氏

癖 岩井 三憲氏

二題(題は当日発表) 西尾 榮氏

一、出句 堀江としを氏・竹中肖二選

兼・席題共各題二句以内(べ切一時半厳守)出句は出席者に限ります。(当日会場で受付)

一、賞 各題最優秀句に東大阪市長その他の賞状及び副賞を贈呈します

一、会費 五百円也(呈記念品及び大会句報)

一、懇親会 千円也

主催 東大阪市文化連盟・東大阪市川柳同好会

後援 東大阪市・東大阪市教育委員会

初歩教室

題「触」

本田恵二朗

川柳を如何に解り易く、明るく、楽しく表現しようかと、長年努力したり苦しみ続けたいるのが私の川柳人生である。それが私の身についた個性でもあることを知りつくしているので今更迎合して意志を曲げるわけにはゆかない。私と異質の個性の作や作家に、常に敬意を表している私である。それは、私の持ち合せないものを見せてもらい、それに教えらるるからである。そこに教えられたり教えらるるのプラスを期待したり、喜んだりしているのだ。

難解に描写しなければ文学でないなどと思ひ込むことはナンセンスである。難解な句が生れたら、それを如何にしてやわらかくほぐすかを一応考えてみるのが望ましい。そこに必ずや文学的意欲を満すであらうものを発見し、獲得することが出来ると私は信じる。

触れそうで触れない話術にやきもきし 漫柳
(触れそうで触れぬ話術にじらされる)

嫁の目を盗んで赤子の頬にキス

サヨ

(嫁の目を盗んで赤ん坊にそっと触れ)
過去の傷触れるは怖し話題変え

藤持

(傷痕に触れそう話題を変えてみる)
臍曲り触ってみたくなる看板

度

(塗りたてに触ってみたい臍曲り)
好い夫婦すれ合っても一寸触れ

日々子

(すれ違ふとき触れあう夫婦仲)
血のようにもえてるカンナに触れてみる

茂美

(陽に炎えるカンナのところに触れてみる)
手を触れぬようにと桃の孤独なり

那智子

(熟すまで触れてもらえぬ桃孤独)
妻だから触れずにそっと信じてる

岳麓

(妻と触れぬようにそっと信じてよう)
予算外毛皮服二度触るだけ

静子

(買わぬより買わぬ毛皮に触れてみる)
サポテンの触れてはならず棘ささる

柳五郎

(サポテンの触れてはならぬとこに触れ)
触れられてならぬ過去あり薄化粧

同

こわ糊の浴衣の触れを祖母好み
(こわ糊の浴衣の感触好む祖母)

瓢太

負けかければすぐ古疵に触れてくる
(負けそうになると古疵に触れてくる)

同

触れなば落ちん風情示してまだ散らず
(触れなば落ちん風情も恋のテクニク)

貞祐

蝸牛触手の先は考えず
(蝸牛の解角ゆうゆうあせらない)

俊風

見合して好きな酒だてが手を触れず
(さかずに触れず我慢の見合席)

同

微笑んで過去の傷にも触れ合える

(傷痕に触れ合い友情あたためる)
傷心へ触れず灯明あげて去る

静枝

(傷心に触れまい焼香の手が震え)
黒い霧触れぬ職場に誇り持ち

同

(黒い霧に触れぬ職場にある誇り)
品に触れ値段を財布に聞いてみる

夢酔

(塗りに触れ惚れたが財布がそっぽ向く)
飯場の昼飯過疎の稲に触れ

紘

(郷愁の飯場の話題稲に触れ)
弱味には触れずに友の苦衷聞く

正則

鳳仙花ところに触れる人を持つ
あたたかい心に触れた社会面

文子

触れおうた視線に淡い恋ごころ
接触をよけて路傍の石をける

江夫

一念の怖さに夢の中で触れ
ちよっとだけ触れたい心肩がこり

双虎

古傷に触れない友の手が温い
感触は玉虫色で得て帰り

伊津志

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪天王寺区空堀町八番地

TEL 三四五二〇四

夜間 四四〇八

傷口に触れる言葉のにくい距離
琴線に触れる合う月と月見草
触れたのをさうしたほどの目で
ぜんそくを田舎の空気に触れさ
感触は上々要求小出しする
誘惑の触手と知らぬ甘い声
感触は左程やり手と思われず
逆鱗に触れて遊地の管理職

同利同翁同 同大
美 童 無人 成

恋進む触れなば落ちん射程距離
 ベン無情私生活にも触れたがり
 人柄の温さに触れて立ち直る
 触れないうでいる思いやり誤解され
 本心を知りたく弱味に触れてみる
 触発の危機も幾たび共に老い
 研鑽のこころ触れ合う友を得て
 巧拙に触れず努力のあとを賞め

同同露同同幸同慶
杖彦

遠花火左遷に触れて欲しくない
触れおうて頬を染めあう紅椿
花に触れ啄木の詩かみしめる
触れたい気おさえて秋の月をほめ

題——友——10月20日締切（12月号発表）
宛先——倉敷市下津井——一九三四

本田恵

近作

今治市 月原 宵明

凡人の足跡波がすぐに消す
一日の徒勞 入道雲笑う
病院へ行くにも女柄を盛り

名古屋市 鈴木可香

仏ばなと誰がつけたか曼珠沙華
女房の一喝 鯖の首を刎ね

手をひかすほど老いていず手をひかれ
犬小屋へ犬の標札つけてやる

大洲市 米
盆おどりすめば夜釣りに行くプラン
都会から見栄の上塗りして戻り
棚経へ細めた甲子園の声

岐阜市市川鱗魚

欲張つてみてもこぼれる器です
窮鼠猫も咬めずついてくだけのスト
亡妻に似た妓に酔うてみる甘さ

東京都 池口 呑歩

現状に甘んじそうな兎に焦り
親馬鹿の独り角力に似た焦り
2DKの檻の中でも兎の瞳澄む

今治市 長野文庫

氏よりも育ちの例の立志伝
釣った気で逆に釣られた王手飛車
神さまも頼りないなと思う歳

▼「川雑時代からおなじみの『同舟近詠』として今日までご支援いただきましたが、本年11月号をもって解消することになりました。したがって同人以外の方の作品は「水煙抄」を飾っていただきますよう、皆様のご指導をお願い申し上げます。

(川柳塔社)

(川柳塔社)

大 萬 川 柳

「幽 霊」

入 選 発 表

選 者		入 選	
川 村 好 郎		四 百 九 十 句	
投 句 総 数		四 百 九 十 句	
入 選		四 十 九 句	
幽霊のからくり税務署見逃がさず	神戸 牧人	幽霊に恰好の柳明る過ぎ	太田 軒太楼
幽霊で出てやりたい程に裏切られ	鳥取 静 泉	クーラーの風へ幽霊出そこない	守口 笑 風
幽霊の不満どの川もどぶくさい	堺 恵 祐	幽霊でよいから逢いたい親心	倉 吉 弘 朗
極限の愛幽霊に姿変え	東大阪 美 子	化けて出る女の執念あわれとも	大 阪 道 子
幽霊の映画で夏を乗り切る気	今 治 宵 明	ウーマンリブ男の幽霊ちらほらと	和歌山 としよ
ピンハネに幽霊も居る頭数	大 阪 柳 宏子	だましたら化けて出ますと目が笑	和歌山 武 雄
幽霊が裾を気にする向い風	宝 塚 静 馬	幽霊どころか夢にも亡夫顔見せず	大 阪 あいき
幽霊でよし証人として来て欲しい	大 阪 君 子	一滴の涙に幽霊満ち足りる	大 阪 美 幸
銀行の金庫に幽霊出ぬものか	和歌山 道 夫	幽霊が出たい柳も森もなく	八 尾 幸 幸
雨の夜は幽霊淋しいなと思ひ	大 阪 小 松園	老人会幽霊を見た人がいる	倉 敷 幸
幽霊の方が怖がる都会の夜	奈良 南 天	恨んでも居ように幽霊出て来ず	兵 庫 近 江

幽霊に出る程女弱くなし	東大阪 千代子
執念の違いか幽霊女だけ	大 阪 つ ね
幽霊にしては立派な事務机	大 阪 蘭
幽霊の方が慌てた試験会	平 田 代 男
頭金幽霊会社にしてやられ	尼 崎 利 美
幽霊の話題が尽きぬ事故現場	笠 岡 忠 三
幽霊がアルミサッシへ引き返し	八 尾 鬼 遊
蚊張釣らぬ夏で幽霊出にくなり	神 戸 どんたく
出霊にとてもなれない肥りすぎ	八 尾 夕 花
秋風に幽霊理性をとり戻し	大 阪 好 一
執念の顔が幽霊に見えてくる	大 阪 好 一
幽霊に防犯灯がじゃまになり	大 阪 好 一
亡霊にすがりつきたい想夫恋	西 宮 百 酒
手口から幽霊会社に足がつき	西 宮 百 酒
幽霊が建てた会社はすぐに消え	大 阪 夫
幽霊に教えてほしい特捜班	奈良 保 夫
幽霊を見る程悪人にもなれず	奈良 保 夫
幽霊でも出れば暑さも忘れよう	奈良 保 夫
化けて出るほど未練な人がいるで	奈良 保 夫

な し	大 阪 智 子
佳 句	大 阪 智 子
良心の目に幽霊が見えてくる	富田林 花 梢
広島に幽霊が恨むきのこ雲	大 阪 好 一
まぼろしの軍靴が響く終戦日	大 阪 美 幸
詫びごとを聞いて幽霊腰だけ	八 尾 漫 柳
盆の墓幽霊同士の恨みごと	伊 丹 漫 柳
化けて出ようにも供養ゆきとき	松 原 サ ヨ



アリナミンA
お役だていただくために タケダ

肉体疲労時・妊娠授乳期・病中病後のビタミンB₁₂補給、神経痛・筋肉痛・腰痛・肩こりの緩和。
☆1日、1〜4錠を、1〜3回に分けて服用してください。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆25ミリ錠のほかに5ミリ錠。

武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27

大阪 あいき

地ノ句 幽霊に自動扉が開かない 文秋

天ノ句 幽霊もダンブの通る辻を避け 洋々

選者 吟 鳥取 洋々

この恨晴らさでおくかと死んださ

昭和五十一年度

ベストテン (八月現在)

- | | | | |
|---|-----|------|-----|
| 一 | 美幸 | 一九〇 | 八尾 |
| 二 | 花梢 | 一六〇 | 富田林 |
| 三 | 百酒 | 一五五 | 西宮 |
| 四 | 鬼遊 | 一五〇 | 八尾 |
| 五 | 牧人 | 一四〇 | 神戸 |
| 六 | 好一 | 一四〇 | 大阪 |
| 七 | 一二三 | 一三、五 | 堺 |

おわび

八木摩太郎

路郎忌にも私発案提唱の鳴戸観潮にも同行出来ず、平戸、唐津、長崎と飛び回り十二日の私宅の川柳会にも帰宅間に合わず、松江、出雲の柳友や堺の柳友に済まぬと思っています。平戸港と堺港はよく類似していると思えました。外人の画く堺の海は平戸の海その儘

八 洋々

一三〇 鳥取

九 静馬

一、五 宝塚

一〇 あいき

一、〇 大阪

一一 君子

一〇 五 大阪

一二 富子

一〇 五 和歌山

一三 幸子

一〇 〇 和歌山

一四 としよ

一〇 〇 和歌山

一五 道夫

一〇 〇 和歌山

一六 憲祐

一〇 〇 堺

一七 智子

九 五 大阪

一八 美子

九 五 東大阪

一九 静泉

九 五 鳥取

二〇 小路

九 五 寝屋川

二一 天笑

九 五 堺

二二 どんたく

九 〇 神戸

二三 多志

八 五 西宮

二四 誓二

八 五 大阪

二五 夕花

八 五 八尾

二六 維久子

八 五 富田林

が、当時の堺風景で無いかと思料します。

長崎のオランダ坂の雨も見ました。殊に唐津の名護屋城で曾呂利新左エ門の造園の近松門左エ門の弟が住職の近松寺、大名の菩提寺広之寺と私著「心のふるさと」記載記事通り実在の人物であると思えました。大阪城につぐ名護屋城は豊公の遺業として城上の月斗の俳句碑見て楽しい清遊でした。

以下略

NHK川柳募集

昭和五十一年度第十一回

「手応え」 五句以内

締切 十月二十五日

第十二回(五十一年度最終)

「とどめ」 五句以内

締切 十一月二十五日

〇締切を厳守して下さい。

投句先

〒583 堺市堀上緑町一三―七

★ 藤井一二三方 大萬川柳係

課題「米」 選者 川村好郎

締切 十月十日限

ハガキに三句

送り先

〒540

大阪市東区馬場町

NHK近畿本部

「老後をたのしく」係

発表は 十月二十三日(土)

午前九時十五分

NHKラジオ第一放送

「老後をたのしく」の時間

中島生々庵 共著
中島小石
句画集

生々庵

頒価 三千元 (送料二百円)

本社でお取次ぎいたします

柳界展望

(原稿締切毎月末)

雑誌三句(未発表句) 投句

料三百円。発表誌希望は別

に二百円。締切は10月末日

投句先〒652神戸市兵庫

区会下山町二の六八・篠原

双人宛。

▼平安川柳社創立20周年記

念全国川柳大会の中に、わ

たしの主張というのがあ

これには橘高薫風氏が発言

される。

▼50年度北海道川柳年度賞

・連盟賞が決定した。年度

賞は「父母のしわその一本

に僕がいる」ほか四篇。橘

爪まさのり。連盟賞は「父

の名の重さよ父の座の軽さ

」ほか四篇。平賀本章。

▼本誌表紙でおなじみの直

原玉青先生がギャラリー本

田(豊屋町)で9月18日(

23日まで日本画展を。また

小品スケッチ展を9月18日

〜23日まで心斎橋のコンセ

フト井上ビル2Fで同時開

催され、両会場とも連日盛

況だった。9月17日午前11

時〜午前11時15分、朝日テ

レビが先生を紹介された。

▼50年度(第14回)国鉄川

柳年度賞が発表された。第

一位は「神に戻るとこなし

山河荒れ果てて」ほか二篇

「斎藤正一。奨励賞に両川

洋々(本社同人)

▼51年度文化祭川柳大会・

第11回川柳文化賞贈呈式が

11月3日、印刷会館で開催

第一部は出席者、第二部は

投句者となっていて、題は

「対岸・企む・狸・溜る・

代表・柳・耐える・高飛車

三句吐。投句料五百円。10

月20日締切〜〒112東京

都文京区千石三の三五の三

「曰倉寿夫方へ」。

▼対流(一行詩研究)季刊

9。川柳は山村祐、俳句は

津久井理一という柱が二本

の異色誌である。一部三百

円、送料百四十円。発行所

〒170東京都豊島区北大

塚1の33の4森林書房。

▼縄(現代川柳研究誌)季

刊4。現代川柳開眼(4)

宮田あきら「が読み物の柱

となっている。河野春三氏

を中心に書かれたものであ

る。一部四百円(〒共) 〒

601京都市南区東九条西

辺町二〇縄発行所。

▼広島川柳会では故山田季

賛(本社同人) 君追悼川柳

句会を九月十八日に市役所

皆実出張所で開催。

▼川柳たけはら九月号で山

内静水氏が「故山田且三(

季賛)氏受勲」と題して、

故人をしのぶ一文を発表さ

れた。なお九月五日の近県

川柳大会へ今治の長野文庫

氏、大洲の米沢暁明氏が出

席、大阪からの栗、小松園

、薫風三氏が交歓、久調を

抒した。この日の総合第2

位は薫風、6位千翁、9位

日満10位鬼焼諸氏で、投句

3位には津田与史氏。

▼川柳番傘九月号から岩井

三窓氏が新しく編集担当。

▽同人の動向△

▼八木摩太郎(堺市)から

「堺市成人学校川柳講座に

菊沢小松園氏(副理事長)

が毎金曜日午後六時十五分



誠意と技術で
世界のために

シャープ株式会社

から二時間担当されると。

▼西尾葉氏は完全に健康を

とりもどされ、各地の句会

にも元気に出席されている

▼若本多久志氏も元気であ

る。愛車で旅行を楽しまれ

ている。

▼河村日満氏（鳥取市）か

ら9月4日に静水さん宅

に一泊、翌5日に大会出席

12日は西日本大会、23日は

句碑建立、24、25日は高知

での大津川柳同窓会と続き

病妻を気にしながらの大会

行脚ですと。

▼橋高薫風氏（豊中市）は

人気作家だけに秋の大会シ

ーズンにはオイソガ氏で、

そこへ執筆依頼もあり落ち

着くヒマがなさそう。

▼西いわを氏（藤井寺市）

は51年度老人福祉作品川柳

の部で二位に入選、府知事

から賞状を受けられた「風

鈴の鳴る風向きへ吊し替え

▼大路美幸氏（八尾市）は

川柳平安九月号一句会（大

念）作品のありかたと問題

点へ「作品は貌である」

を執筆。好漢、快調の進撃

である。

▼原田一風氏（今治市）が

8月10日来社。編集室で一

三夫・葉子さんと柳談。ち

ょうど編集集中で失礼しまし

た。

▼村田颯太氏（守口市）が

主宰する関西奇術教室の創

立10周年記念公演「奇術の

祭典」が9月23日に大阪厚

生年金会館中ホールで開催

特別出演に松竹芸能のゼン

ジー中村氏が参加するなど

好評満員だった。

▼堀江正朗・芳子ご夫妻（

島根県）にお孫さん誕生、

由起子と命名された。11

月の島根県の文化祭に緑之

助、晃男、通児、明朗、正

朗諸氏が招待作家として出

席される。

▼中川晃男、藤田軒太樓両

氏はほかの還暦祝賀句会が8

月22日に玉造温泉大和寮で

開催された。寄せ書きには

島根の同人がズバリならん

で盛会をしのばせた。

▼小泉無聖氏（宝塚市）か

ら一本社句会へ出席してみ

なさんの上手な句に接し、

古稀からの手習いをもう一

度やり直しますと。

▼行天千代さん（貝塚市）

は甲狀腺腫悪化のため8月

20日入院された。早いこ快

癒を祈ります。

とのこと。

▼吉田水車氏（名古屋市）

は8月25日逝去。詳細は次

号。合掌。

▼小川静観堂氏（伊丹市）

は9月19日逝去。詳細は次

号。合掌。

▼中村ゆきを氏（神戸市）

の鑑父中村清太郎氏（七三

歳）が胃ガンで逝去。葬儀

は8月4日自宅で行なわれ

た。

▼旅便り、句会はP 67へ。

新同人紹介

田 中 笑 風

胡蝶・与呂志・一三夫―推薦

は甲狀腺腫悪化のため8月

20日入院された。早いこ快

癒を祈ります。

とのこと。

▼吉田水車氏（名古屋市）

は8月25日逝去。詳細は次

号。合掌。

▼小川静観堂氏（伊丹市）

は9月19日逝去。詳細は次

号。合掌。

▼中村ゆきを氏（神戸市）

の鑑父中村清太郎氏（七三

歳）が胃ガンで逝去。葬儀

は8月4日自宅で行なわれ

た。

▼旅便り、句会はP 67へ。

ショッピング・ゾーン

梅田
一番地

楽しいショッ
ピングくを皆
いこい百貨



大阪梅田・水曜定休

阪神

電話 345-1201(代)

本社九月旬会

会場 金属会館

七日 午後六時

いよいよ作句シーズンにはいる。10月3日の二賞発表旬会は前年の中小企業文化会館で開催することを柳宏子氏から報告された。

開会に先きだつて8月に死去された鳥取の森田茗人氏と名古屋の吉田水車氏に黙祷をさされた。すでに湧三・古心・多蘭子・曉風・十止庵・季賛諸氏が不帰の客となっている。多久志氏の柳話はNHKテレビの「風と雲と虹と」から、時代考証の虚をつき、当時の生活様式と今日の違いを、国文学者などの著書から歴史の裏面史を興味深く語られた。

便所や風呂の話から、当時の才女といわれた女官は垢だらけだったとか——。よく調べる時間がなかったと前置きされたが、いつもの柳話よりよかつたとは陰の声。

月間賞杯は香川醉々氏にかがやいた。

(進行・西田柳宏子・記録・高杉鬼遊)

出席―与呂志・古方・栞・雅風・重人・滋雀・いわを・水客・敏・与央・蘭・多久志・潮花・柳志・右近・肖二・綾女・静馬・川狂

子・道夫・太茂津・きみ・幸・千寿子・寿美子・漫柳・一三夫・度・瓢太・庸佑・柳宏子・誓二・醉升・としよ・花梢・夕花・千万子・生々庵・美幸・無型・形水・勝晴・吸江・凡九郎・一舟・岳人・恒明・つき子・喜風・鎮彦・千梢・牧人・文秋・一念・野生・智子・君子・博泉・あいき・醉々・静歩・鬼遊・弥生・好郎・雀踊子・頂留子・薫風・小松園・儀一・葉子。

席題「好き」

小川 恒明選

好きだといえず逆つてばかりいる 夕花
仲人はどうでも好きにする 話術 柳志
何時からか出逢う視線がまぶしくて 好き 博泉
大好きと言われてサイフゆるめてる 好き 綾女
好きずきがあるので商売やつて行け マンガ好きで大人にはなりきれず 君子
好きなことしなはれと女房の評価です 好き 凡九郎
好きこそ上手が貧乏くじを引く 日 凡九郎
日の丸の好きな男の浪花節 人形が好きな女の子守唄 鬼遊
好きという一言二つの耳が待つ ドンファンはどんな花でも好きと言う 千万子
日記帳このあたりから好きになり 好きな道に通行禁止の机がある 日誌 幸
世話好きな男に急所押えられ 好きな人過去へ消してある 水客
好きな空蒼く碧く青くなつて暮れ 野口五郎が好きなおばあさんになる 許せないことに好きなひとの噂 弥生

脇役が好きと花東もらわれない 天皇の笑顔が好きになれません 好きという一言いえぬ日の長さ 地獄絵が好きで汚職の間に飾る 生活の匂う男で好きになる 少しアホーになると好きになる女 好き好きと九官鳥も聞き飽きる 時刻表が好きで心の旅に出る 好きだから姿を消してやるんだな

席題「乳房」

金井 文秋選

乳房が張つて母の祈りが満ちてくる 弄ぶ乳房に微笑む母でいる 石女の乳房にかなしみ隠される 乳房の貫録ミルクを寄せつけず 母病んで祖母の乳房が児をねかせ 子を産まぬ乳房ひとり言が好き 冷えきった乳房が燃える 海女の夜 四人の子育み母の乳房萎え こぼれそうなポインかかえてかつ歩る 惜しみなく与えた乳房の挽歌聞く 商魂は河童の胸をふくらませ 逃亡の女に乳房張つてくる 忘れた捨て子が呼ぶか乳房張る 豊満だけの乳房で子にやらず 乳房ふくらんで来て父を遠ざかり ママさんバレー揺れる乳房の胸を張り むしゃぶりの乳房満ち足り子の寝息 豊満な乳房が匂う 観世音 愛を得た乳房はバラの彩りで

水客 美幸 与史 醉々 花梢 吸江 恒明

ことづけを頼まれ田舎のバス動く
新調の服が泣いてるバス旅行
夢乗せて観光バスは西東
バスガールだった愛妻よく歌い
絶景をバスゆつくりと恐がらせ
雨降れば雨をたたえてバスガイド
バスガイド旅のみやげに安来節
紫香柳 信女 芳子 正朗 杜的 夢酔

川柳塔社

大阪・東京
大丸
京都・神戸

バス降りてからどぶ臭い子らの群れ
町内のムードのまんまバスの旅
停滞へバスは泰然自若たり 柳宏子

兼題「森」

西
いわを選

人里へ森を追われた熊が出る
手風琴奏でる詩人森が好き
メルヘンの森には青い鳥がいる
少年の秘密は森の中にある
森の中覗くと過去がひそんでる
どんぐりははずんで森の外へ落ち
鹿の子へ森の梢に残る雨
児が眠れば童話の森の夜が明ける
たそがれて野鳥が森へ急ぐ声
森の怪女は白髪に気を許し
防風林になって面目保つ森
森へ来て近くに滝のあるを知り
キャンパスの森の緑が気に入らず
七人の小人が童話の森に住み
自閉症森を知らないかぶと虫
秘伝開扉森から朝の陽がこぼれ
落ち葉にもロマン匂わす森の風
一枚の切符が森に落ちている
霧の森白衣の神の住むごとく
材られてる森にとまどう渡り鳥
悲しみの星座がひかる森の上
巣箱みな仲むつまじい朝の森
一番星見つけた森にビルが建ち
スモッグに枯葉が目立つ神の森
暗い森子供はお伽の国にする

正朗
酔々
牧人
鬼遊
鬼々
一舟
潮花
君子
庸佑
静馬
千寿子
一三夫
庸佑
雀踊子
鬼遊
水客
幸

花梢
どんたく
好郎
酔々
維久子
静馬
小松園
漫柳

渡り鳥住みつく森はまちがえず
切株で語ろう明治の声を聞く
キャンブする森妖精もうかれてる
泣きに來た森で小鳥の歌を聞く
星月夜森の小人が踊り出し
炭焼の古い斧から森の唄
森かげに二人の愛の詩を刻む
森深く咲いて知られず花が散る
危うきは森は史跡に守られる
森の中抜けると人形の家がある
一人旅森は意外におしやべりで
クレオンを三本折って森が出来
泣き言を鎮守の森へ言いに来る
カラスの子鎮守の森にもう居ない
森の朝鳥のコーラスから明ける
母なき子祭ばやしのをぬけ
遠花火見えなくなつて森しげる

兼題「かぼちゃ」(紫香氏代選)

野村太茂津選

正朗
吸江
度
静
柳宏子
鬼遊
無聖
潮花
一念
岳度
千梢
静歩
美幸
柳宏子
栗
いわを

気の合はぬ隣りとかぼちや知らず伸び
里帰るかぼちやかぼちやの日が続き
かぼちやと思えとスピーチはげまされ
献立表へかぼちやも入れて明日満ちたす
見向かれぬうらなりにかぼちやの一人言
おぞをおそる出したかぼちやがお氣に召し
かぼちやにも産割があり芽を摘まれ
女社長かぼちやが好きで憎めない
かぼちや売る店で冬至を教えられ

正朗
吸江
度
静
柳宏子
鬼遊
無聖
潮花
一念
岳度
千梢
静歩
美幸
柳宏子
栗
いわを

どんたく
維久子
清女子
静馬
右近
一三夫
柳志



高級洋菓子・レストラン

本店 洋菓子部TEL (21)2334
レストランTEL (33)9974

かばちやごろごろ高座は金になる咄
大陸を語るのかばちやの種を噛み
一番のりのかばちやが母を連れ来る
たくましの生き様かばちやの鱧に似る
倦怠期今日もかばちやであしらわれ
八百屋でもテンとかばちやが威張つて
爪がたを入れられカボチャ売れ残り
爪あとのかばちや値ふみに堪えている
カロリーがどうのとかばちや食べきれ
テント虫かばちやの花に染りそう
お目かけの悪いが自慢かばちやです
おやかなかばちやと思う物価高
汚職から遠くかばちやが大好きで
外食で知ったかばちやのうまい味
ふるさとはかばちやごはんを盛つてくれ
鬼遊
滋雀
道幸
一舟
柳宏子
花梢
きみ
好郎
雀踊子
生々庵
静歩
重人
儀一
与呂志

おいしいと褒めたら今日も又かぼちゃ
かぼちゃにも追憶があり戦前派
冬至まで待てぬかぼちゃの私語を聞く
うらなりのかぼちゃ鳥に侮られ
かぼちゃさえ器量よいのが先に売れ
演壇はカボチャ頭とみて話し
かぼちゃごろごろ打ち首に似て寒し
中ビ連かぼちゃが好きとおしらず
かぼちゃにもかぼちゃの顔があるらしく
料亭のかぼちゃは赤絵の皿にのり
かぼちゃツクヅクとこが俺と似てるんか
かぼちゃでも銭取る料理する自信
かぼちゃでも持つて帰れと故郷の老母
整形がばれるかぼちゃの子が生れ
大笑いされてかぼちゃは転がされ
シンデレラにならずかぼちゃ。買いに行く
雷鳴にかぼちゃ泰然自若なり

酔 升
右 近
つき子
牧 人
としよ
柳 宏子
一三夫
多 久志
潮 花
寿 美子
凡 九郎
一 舟
勝 晴
恒 明
鎮 彦
とき子
酔 々

一分間の柳論

軽み、うがち、ユーモアの句を作れと教
わりそれになうよう努力して来ましたが
此の頃の句を拝見していると私なんか頭の
切り換えが悪いのか古いのか、とんと分ら
なくなってきました。と云うのは軽み、ユ
ーモアがなくなってきたり来ているように思えま
す。自分の感情を句にしたところで同じよ
うな境遇の人ならピンと来るでしょうが、
万人向きがしいと思います。いろいろ考
えたあげく、人の胸を打たんようじゃ生き

迷信によわく冬至のかぼちゃ煮る
熟れかぼちゃ母に逢いなくなってくる
美人ではないがかぼちゃの座は広い
かぼちゃどう見ても日本のものでなし
母の忌に好きなかぼちゃが花をつけ
古かぼちゃ掲げて冬至に母が来る
夏雲の浮気を見る土手かぼちゃ
煮かぼちゃにくやしい戦の味がある
太茂津

兼題「結ぶ」

大坂 形水選

神様のブランの中の縁結び
靴のひもを結んで今日と対峙する
三面 鏡女 出陣の帯結ぶ
先生と親を無視して結ばれる
結ばれるシーンを砂浜消してゆく
嫁ぐ日の帯は涙で結ばれる
実を結ぶまでに育てた梅の鉢
神様のブランの中の縁結び
靴のひもを結んで今日と対峙する
三面 鏡女 出陣の帯結ぶ
先生と親を無視して結ばれる
結ばれるシーンを砂浜消してゆく
嫁ぐ日の帯は涙で結ばれる
実を結ぶまでに育てた梅の鉢

室谷徹舟

た句と思えないと思います。いつまでも人
様の胸に残っている句こそ永遠に生きてい
る句だと思えます。昭和四十三年に生々庵
先生が出された「川柳講座」にもそのよう
な意味の事が書いて居られたような記憶も
あります。むずかしい一人よがりの句を作
らず、誰でもほくそ笑むような句を作ろう
ではありませんか。でないと新人がついて
行き難いです。

合掌の指を結めば弥陀の声
いとほんと結ばれ子飼いのれん継ぐ
火中の栗裏切り者と手を結ぶ
結ばれてからが喜劇のブローグ
命綱結んで夫婦の息が合う
結び目をゆるめて女の荷が届く
結び目をゆるめて女は賭ける
弁護士と結んで身内をかるんじ
結び目に来てから夫婦猫を飼う
ネクタイの結び目謀叛が秘めたる
靴紐を結ぶ夫の背が丸い
星を結ぶとおとこ話が落ちてくる
結び目疲れて絵まが裏がえり
結ぶ手の裏を世論が凝視する
茶柱に結びつけて今日の賭け
決断の出動しかと結ぶタイ
芸人として角帯を結び馴れ
風呂敷もともに結ぶぬ赤い爪
身障児マヒの唇結べない
宿縁の結び目固く火花散る
明け方にやとつと労使は手を結ぶ
七人を求めて靴のひも結ぶ
少年の負けん気明日の口結ぶ
喪の帯をかたく結んで愛一つ
静かなる妻の寝息で今日結ぶ
人と人結ぶ絆が露地にある
原点に戻り結び目締め直す
合掌の指を結めば弥陀の声
いとほんと結ばれ子飼いのれん継ぐ
火中の栗裏切り者と手を結ぶ
結ばれてからが喜劇のブローグ
命綱結んで夫婦の息が合う
結び目をゆるめて女の荷が届く
結び目をゆるめて女は賭ける
弁護士と結んで身内をかるんじ
結び目に来てから夫婦猫を飼う
ネクタイの結び目謀叛が秘めたる
靴紐を結ぶ夫の背が丸い
星を結ぶとおとこ話が落ちてくる
結び目疲れて絵まが裏がえり
結ぶ手の裏を世論が凝視する
茶柱に結びつけて今日の賭け
決断の出動しかと結ぶタイ
芸人として角帯を結び馴れ
風呂敷もともに結ぶぬ赤い爪
身障児マヒの唇結べない
宿縁の結び目固く火花散る
明け方にやとつと労使は手を結ぶ
七人を求めて靴のひも結ぶ
少年の負けん気明日の口結ぶ
喪の帯をかたく結んで愛一つ
静かなる妻の寝息で今日結ぶ
人と人結ぶ絆が露地にある
原点に戻り結び目締め直す

(河井庸佑整理)

老地樹壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

菓の花句会

高杉鬼遊報

積んだ悪 包む風呂敷小さくて 鹿蔵
屋上のさつきは咲けば降ろされる 綾女
たばこの空箱天井まで積むと癌 度
大らかにアダムとイブになる祭 肖二
ライバルの積み木の揺れは見逃さぬ 幸生
屋上へ新入社員呼び出され 葉
島の午後炎天にする石切場 鬼遊
下町のくらしになってから星きれ 弥生
積る話の袋を提げて母がくる 牧人
赤道の星を見たまま冷凍魚 紀美代
アメリカの星も見えていた水溜り 岳人
炎天に汗の掟が重くある 美幸
朝星の土工へ容赦のないあぶる 雅風
屋上の窓は廻り木馬が知っている 万里
炎天に庶民は乾される者とされ 鶴声
左遷の地祭りばやしに子が弾む 夕花
約束の時間にこない流れ星 酔々
只管打坐して炎天に逆らわず 誓二
正直なグラスで泡が乗せてある 凡九郎
炎天下お喋りさんにつかまった 恒明

いずも川柳会

板垣草丘報

太陽の光りが欲しい鉄格子 虎秋
子も孫も水の魅力の里帰り 水煙
チラリ目を庭へ逮捕の部屋を出る 正朗
水打って庭は一番好きな場所 早苗
まず値段聞いて驚く庭の石 幹伸
水害はないかと土建屋の本音 河南
君が代も聞けば水泳幕となり 可保留
光公害出雲は他人事に聞く 通児
精をを出す汗陽光のある限り 孤呂二
限りある水に頼って城下町 町紅
光つてる内はせせと磨かれる 軒太楼
引越しの荷物噂と共に来る 春軒
湯水をまた繰り返す机上案 晃男
七光りなどと実力認めない 祥月
庭続き隣りの客は趣味の人 明朗
灯を消して水の音聞く山の宿 代仕男
幾山河越した証しの皺の数 独仙
必要品水都松江のポリバケツ 草丘
陽は庭に一時間ほどの街の幸 緑之助
京都・塔の会 松川杜的報
金勘定仕事以外は大儀なり 求芽
雨を手を受け受け傘を貸して来る 紫香
枯れすすき唄う夫婦の声揃う 明代
捨て石の役にもなれず半世紀 白漢子
石投げてアベック話題の間を繋ぎ 杜的
城砦の石それぞれ顔を持つ 潮花
遣り水の流れる底の石光る 誠史
盆栽に脇役という石を置く 客遊子
かんじんの事が記録にされていず 笛珠
臍しゃんとしめて値上げへ対峙する

昼寝の子臍にとまった蠅を追いかける
あるかないかに描かれてる裸婦の臍
五ツ子の臍へそへそがほほえませ
極楽は臍丸出しで飲むビール
臍に垢いっぱい溜めたきれいい好き
臍に茶をわかすネタなし世相悪
陰陽石巨大おらかな眼で見られ
川柳しんぐう 川上大輪報

青春の水着が海に炎えている
はち切れるビキニへ二十の夢を盛る
忘れたい夏へ水着の跡があり
寒中にニッコウ笑う水着ショウ
商魂は真冬に水着コンテスト
申し訳の水着で親の気をもませ
身を守る水着が挑戦するかたち
泳げない母の水着は笑えない
生きざまを悔いる不眠へ雨の音
遅く寝た不眠の母が先に起き
ひと様のことでねむれぬ苦勞性
ねばってる兄は母さんを知ってる
石頭笑われながら信じられ
頭からあかんと決めて切り出さず
阿呆になれなれと頭を下げされ
よい頭使いそこねて世を害す
祖母だけが二つつむじをほめてやる
言い聞かす時も頭を撫でた母
マネキンは八頭身で夢誘う
狭き門頭のでかいのが通り
喋らねば頭の悪い子に見えず
南大阪川柳会 中川滋雀報

永楽 蘇鳥 飛鳥 王石 三求 比呂志 水客
与史 幸 富子 華子 まさ子 恵美子 福水 十郎 寅藏 武雄 柳志 雀踊子 平城 千寿子 湊水 輝寿 明 大輪 栄

非科学的な親のつばだが傷に効く

つまずいた大人は過去にとじこもる

ネオン街おとなの空白埋めるそこ

大人はいいなと思つた頃が懐かし

子の耳におとなの嘘がこびり付き

騙した方をおとなと思うこともある

願つてもない倅せにあつた罌

テルテル坊主子らの願いがぬれて

乾杯のグラスに映えている願

待つ人を信じています花時計

教会の花壇痛みの石を置く

付けたりのなう父の日が出来る

子がみんな母の味方になる孤独

父の日の父の威厳を確かめる

親の目に頼りないのが父になり

父と子の温みがかよう肩車

ビタミンにくわしくなつた病上り

死にたいと云うがビタミン何時も

ビタミンへ都会につかれた顔がある

川柳たけはら

指先でつけば生きていた金魚

アジサイに愛身というテクニク

男二人螢を語る四十かな

手芸だいすきよ私は女の子

子を叱る声来客へ切り替える

風呂で飲むビールを小さき箸とす

信じられるものあり螢の光追う

塩焼きにされては鮎という誇り

完全に負けてはいないだまつく

人間不信 紫陽花の花見でいたり

鬼遊 度 千万子 あいき 儀一 智子 小松園 柳志 醉々 好郎 作二郎 肖二 文秋 柳宏子 好一 滋雀 恒明 一舟 雀踊子 森井善居報 静水 房子 不朽 愛 青居 寛子 笑子 文晴 蘭幸 白狐

歳五十昔話の暖かさ

大樹なお胸によすがの名をさがす

不器用な嘘が額に汗をかき

降りる駅心得ている缶ビール

驚かせて済まぬメダカが逃げてゆく

ヒロシマにまた夏來たる 碑文読む

街灯の明りほのかに母匂う

終点がないから脱げぬ旅衣

白いページ開いて心に嘘はなし

シャンデリア灯けて心の暗い夜

オースケール川柳会 大坂形水報

灰色の高官悪夢の夜が続く

迷い子も特売場の忘れ物

新入社渡る世間に鬼がいた

渡された請求書に酔いがさめ

悪い夢みていたことにして忘れ

忘れ物よくする奴で親しまれ

梅雨時にぬぐらをさがす渡り者

神経をとがらせるビルの忘れ物

悪夢だったとぼとほ帰る競馬場

忘れものらしい小包までよって行き

ネクタイを忘れ男が締まらな

快楽の美酒ではじまった悪夢

そつけない返事が返る忘れもの

石橋を叩いて渡る暇がない

家計簿へ雑費にしとく忘れ物

丸木橋渡る思いで切る手形

主婦の鎖がとけた日の忘れ物

忘れ物取りに行けない借りがあり

儲けしか知らぬ男の忘れ物

どんぐり川柳会

谷垣史好報

政己 紫光 花炎 一路 英詩 篤史 のぼら 千代美 貞子 秀川 常夢 型地 貞彦 千夢 洋々 栄 亜成 博泉 健坊 有一 一扇 野生 亜也子 弥生 一念 入仙 好郎

戻れない橋がかかっている地元

逃避一日パチンコをして帰る

飯場の湯石けん一個あれば足る

アニマルに属し地元四季を見ず

真向いを避けて女は席に就き

俺の眼を社長が避けるボーナス期

氣を許す人の連れる犬避ける

濡れ衣のまま地元には着せず

他所者の悲しさ地元押し切られ

赤鬼を避けて青鬼先きに出る

地元から大臣高官出ぬ誇り

大臣の地元の医者を欲し村

石けんの香りほのかに倅です

旅に出て地元よきもわかりかけ

地元では造らぬ観光土産売る

手近かなる物より初むたき売り

佳句地10選 (前月号から)

野村太茂 津選

手袋のままの握手に残る悔い

かりそめの恋は空気の抜けたまま

頼られて未熟が負うた深い傷

旅人に岬の風は物足らず

指人形哀しい恋は語らない

強引の嘘は臉を伏せたまま

悪友をかばう此の子も父なし

裸虫やがては蝶になる誇り

土鈴振れば貧しき村の音で鳴る

ふところの温い男にある決め手

鬼遊 静波 美幸 恵郎 好遊 いわを 弥生 吸江 岳人 由雄 喜砂 真砂 生長 鎮彦 五風

避け得ぬと観念したが立ち向い
孫避けて裏へまわれれば孫に会い
かくし芸手近かな盆で間に合せ
避けた道運命などは信じない

川柳大阪

見島与呂志報

地平線地球の果てで丸くなり
母子でも一線を引く預金高
痛そうに出血と書く大バーゲン
宝石の不満バーゲンに並べられ
改めて話をすれば分つてくれ
心地よい目覚め生きている意義を知る
ベテランは年期的に入った波の味
単線の旅で素ぼくの味拾い
老夫婦黙々過疎で米作る
点と線結ばば過去のある女
カルテ書くドイツ語ゆえに又おびえ
バーゲンの宿でマネキン邪魔がられ
一杯の盃女をこうも変え
天地人見事に抜けて師の年
女心好きと言わせる気の散歩
くどすぎたまた叱られた老婆
名人の至芸歴史が貫かれ
難問ヘセコンドの音せわしく
はとほとと歴史をつづる今日を生き

川柳東大阪

竹中肖二報

削られる覚悟は出きてる
初鯉私は飲めぬ不粋者
初鯉妻ねぎらいのビール添え
着飾った女は焼き芋など食べぬ
女同士で焼き芋のあみだくじ
芋を焼く母に童話がよみがえる

来客の遠慮が小皿にすててある
受け皿となつて妻たり母であり
灰皿をいっばいにして浮きがなし
味噌汁の中で豆腐の漂き沈み
味噌汁の荷台にネギも積んでいる
味噌汁に豆腐屋上手に残る味
泳がせて豆腐屋上手にすくい上げ
機械化の豆腐屋ゆつくり起きて来る
共稼ぎ奴にしとけ耐がある
風邪癒えて玉子豆腐の口あたり
割箸が芋のうまさをかきざりあて
子沢山小粒のイチゴに馴らされる
大名の気分で宿の繕にたつき
団体さん待つ繕並ぶ大広間

ハワイ川柳ウイロー社 林蒼蛇樓報

同窓会友の噂もまた楽し
あの化粧ただの噂と思われず
噂など七十五日言わしとけ
噂だけまいて素しらぬ顔でいる
噂とは別に気品のあるご仁
浮草の様なうわさに眼を腫らし
帰りに孫や噂が待って居り
ゼネストの噂に食品買いあさり
噂どおりばれて三面賑やか
噂など気にもかけない出来た人
真相より早く噂が故里につき
聞こないふりで噂に耳を立て
人柄が汚職の噂うなずかせ
玉の興 噂話に飯が焦げ
否定するほど揺がって行く噂
そんなこと噂ですよとそらとぼけ

高橋操子

句碑建立記念句会

日時 昭和51年11月23日(祝日)

会場 久米田寺境内(国鉄阪和線久米田駅下車・東へ徒歩10分)

司会 西田 柳宏子
柳話 中島 生々庵
兼題 「池」 榎本 聡夢 選
「竹」 梶川 雄二郎 選
「幕」 川村 好郎 選
「女」 菊沢 小松園 選
「石」 西尾 菜 選
「菊」 岡橋 宣介 選
「善意」 八木 摩太郎 選
「紋付」 若本 多久志 選
(アイウエオ順)

締切 午後一時(席題なし・各題二句)
呈賞 各題秀句

岸和田市野田町一七五番地

電話 0724 6631

かりそめの噂がうわき生む噂 三石
小走りで噂聞きたい顔が寄り 雪女

身を持して噂の種に過ぎかる
黒い霧うわさで済んでばつとする

生 蒼 生 快夢起

遠慮せず車内販売立ち替り

車内販売何なら無言の受け渡し

ちよっかいへ車内販売素通す

新幹線前が買うから釣り込まれ

車内販売来るまで腹が辛抱せず

車内販売終着駅でホットする

車内販売時には不愛想な娘も混じり

飲み物がよく売れてる車内販売

車内販売売忘れた土産に合せ

車内販売トイレに行くのに邪魔になる

むずかる子車内販売来てだまり

気が判ってお人好しと知り

救急車殿しい使命の音立てて

高官もたいはタイホで身を締め

和歌山七面句会 中筋三幸報

おとなりへ期待外れの人座り

砂に書く祈りを風が消してゆく

北海の灯台守と云う美談

隣席が唄いはじめて気がもめる

砂浜もやせて大きくなる企業

宿の下駄砂に秘密を持ち帰る

来て見れば灯台だけの観光記

灯台へひとりの影をもち歩く

髭剃って灯台守の五十年

都市砂漠でマンション派手に顔を売る

暗い海灯台の光り一筋に

台風が来て灯台は憶えられ

新婚の隣の灯り気にかかり

晶子

礼三

子

灯台のそこまで歩く足達者 三幸

川柳塔まっえ 祥月報

疑えばカルテ横文字憎うなる

下心ある進物をもてあまし

進物に粗品と書いた頼みごと

外装のわりに進物粗末なり

独逸語のカルテ患者にある不安

検査のカルテは厳し黒い金

浴衣着た市長と土曜日で逢い

土曜夜市途中の店はみんな締め

横とれば土曜夜市の町が見え

やがてメス汚職カルテの裏おもて

裁判官交れば判決まで変り

進物を届け愚かさを見られ

ピーナツとかいう進物に国が揺れ

国民の信頼司直背に浴びる

カルテ或日事件の謎解く鍵となる

花火合図に土曜夜市の人が混む

川柳後案(岡山) 井上柳五郎報

無理にとは云いまんがと無理を云い

無理だけど女の涙に負けてやり

無理を言うらしい手土産提げて来る

応分と言われた寄附に無理がつき

黙り込み歯痛に堪えるため息を

くたがれた背広がため息ついている

溜息へ女房一本つけてくれ

家計簿へ溜息そつと畳みこみ

溜息は女の弱さ知っている

溜息の重さを父の背にみる

汗くさいシャツから出した定期券

定期券忘れ財布まで忘れ

佐加恵

恒洋

昭和51年度大阪文化祭

第28回川柳大会

日時 11月7日(日) 10時開場1時締切

会場 中央公会堂(3階小集會室) 地下鉄「淀屋橋」中之島公園内

講演 「大阪の史蹟」

兼題 大阪市立博物館長

「シンボル」

「妻」

「芝」

「近頃のニュースから」

「幻(まぼろし)」

「泡」

席題 当日4題・各題2句・締切1時

出句は出席者に限ります。(兼

・席題共、当日会場で受付)

賞 兼・席題の秀句に、府知事・大

阪市長、府市教委長から「川柳

賞」選者から「選者賞」を贈呈

入選句集代三百円・当日申込受

付

句集

主催 大阪府・大阪市・大阪府教育

委員会・大阪府教育委員会

主催

委員会・大阪府教育委員会

主催

委員会・大阪府教育委員会

主催

委員会・大阪府教育委員会

主催

委員会・大阪府教育委員会

入院で欠伸している定期券めぐみ
定期券何回買っても平社員ひろし
冷房の離れた非番の白い床博友
冷房に和む一家の青畳雷山
冷房をきかせて熱い茶をすする勝
スカートの足冷房をもてあまし久米雄

堺川柳会

野坂つき子報

相談がまとまり冷めたお茶をのむ正和
労組で帰えれぬ娘らの盆踊り邦晴
思いやり受入れかねる老心昌水
プレゼント黙って差し出す夫の手清女
茶のかおり心のかよう人といふ宏子
蹟いた石堀りおこす上り坂小松園
猪口置いて正調おけさのリズム聞く笑痴
正直を看板にしてよう稼ぎ天笑
騒音もリズム職場に生きる貌千万子
トマトジュースで朝のリズムになつてくるつき子

城北川柳会

川口弘生報

ザ・エンド連想しながら読み明し星斗
入道雲帰りに寄ろうビヤホール満屋子
勝者も敗者もそれは涙三十四
行く雲に孫悟空が乗っている喜代子
連想は仕合せばかり続くなり千子
マリヤ像画伯の恋が秘めてある弘生
強引な孫のおねだりうれしがり玉子
強引な男と男火花散り恒治
心電図暗に強引いましめる右近
強引な寄附半額で妥結する秀村
強引の嘘は睡を伏せたまま美幸
一と味を小指で試す母の智恵茶々坊
物価高老後の備えも目減りしてつね

御先祖へ炊きたての飯お茶も添え
出稼ぎも盆には先祖の墓詣り一休
子のきやつ先祖へ先という鉄道子
世の不況先祖の墓もままならずますえ

三井が丘川柳会

高田博泉報

夏祭過ぎて悲しい原爆忌薫風
裸でも平気で居れる男冥迦草生
夏休み故郷がなくててもあまし野生
社長室夏でも熱いお茶を出し惠美子
この夏をまた生きのびて冷やっこ鬼遊
街路樹で昔の夏を守る蟬度

ニユース追う耳は発表まで待てず

柳宏子

発表真近自信は遠く消えていた
先生の優しさ厳しき身にしてみて
先生と呼ばれどきまきふり返り隆子
先生のまねが得意のガキ大将てまり
風雲よそに大先生のお国入り一
一匹狼に先生などとはない一
先生が言うてるさかいそうしとこ博泉
裏金の多少が先生の価値をきめ
先生の顔でなかったバチンコ屋小
めだたない子で先生忘れられベ女
先生の若さが園児の輪にとける亜也子
先生の靴は誰かが揃えとき小松園
さて何の先生かマダムも知つてない形水
長病みの指の白さも夏に入る牧人
直木賞唯それだけで版重ね五木
胸上げの選手に涙の鬼コーチ照沖
暴力追放と書いた看板倒れてい
広坊

紅川柳倶楽部(唐津)

新岡回天子報

十月新学期 会員募集

毎週水曜日・月四回
夜6時30分〜8時30分
六カ月で初等科修了

大阪市南区大宝寺中之町一
誓得寺内

関西奇術教室

TEL(071)七二八

実習生馴れぬ手つきで客たまり
暴力追放鈴をつけるは誰が役
暴力を警民見事追放す岩光
新任地暴力追放から始め畑中
人の世に蚊と蟬等はいらぬなり
三日造
桑原
勝一
紫浪
虹天
家庭から暴力追放むつまじい
回天子
極谷漫柳報
年毎に地図で楽しむ夏休みやす江
クラス会孫の自慢に花が咲き三代
たびたびの義理の重さで筆が起き季女
童心にかえつてさくぐクラス会きくえ
ベランダの団地サイズの笹小さく瑞枝
絶望にいとむ若人うらやまし漫重
いやなと相談出来る良い仲間てい一
川柳わかやま
津田与史報

嫁ぐ朝父の散歩に添うて出る
精霊舟流れるまでの罪の音
裏切りのその後時計が重くなる
孫の守りハンドバッグの口があく
抱えても提げてもバッグ淋しい目
散歩道変えても月がおともする
その後は以下同文と束ねられ
人生の散歩と思ううたの道
鍵束が人間不信の音で鳴り
久し振り友達下駄の音で来る
洗濯機まわって平和な朝の音
あの人のその後の瞬間かぬ振り
そう言えはその後小蟹が顔見せぬ
あの方のその後の噂気にかかり
決断をつけたその後もある余情
女心の渴きバッグは空で持ち
与史

雅号ぶっちゃけばなし (152)

りふう



小幡里風

おばた

キビの青春があり (当時大阪在住) 信頼していた先生 (医師) が君にはセンスがあると煽てられ俳句をやれと強制的、郷里を離れている君だ里の様子を風のたよりで知りたい筈、本名にも関りもあるし里風がいいと先生に戴いたものです。

その後現役、召集と十余年を殆ど前線里風の名のもと俳句を見つめたものです。戦後荒んだ心への潤はこれだといった川柳にひかれこの道への虜となり当時改名も考えたのですが里風も捨て難くすると現在です。この処斗病が続き里風の名も風前の灯？

その風その灯の中でこの一句掴みたく願や切。

呉服商 (六十六歳)

散歩する砂に全快試される 太茂津
渚行く少女にかえる妻でよし きみ
ハンドバッグがよそ行きの顔つくる 千寿子
幼い日の神童その後只の人 喜与司

▽旅 信△

▼菊沢小松園氏から―篠山
デカンショ祭り寄書き
拝受。―デカンショに合わ
ず手振りて若返る―小松園
▼田垣方大氏 (倉敷市) か
ら―吉備路にて古墳の石に
語りかけ―方大。

▼橋高薫風氏から―竹原へ
の車中の寄せ書きをいただ
く。―冗談も川柳という汽
車の中―牧人。―瀬戸海の
青を見ている鬼ひとり―鬼
遊。

▼句 会▲
▼堺川柳会は、10月12日 (火) 午後6時から八木摩天
郎居で開催。兼題―ゆれる

台風17号の被害地皆様へ心か
らお見舞い申しあげます。
ご無事でありますように。

・許す・不足・押つけ。
▼南大阪川柳会は10月20日
(水) 午後6時から松崎町
三の大萬で開催。題は―弱
願・機転・慣れあ・息抜き
▼南海川柳会は10月21日午
後6時から南海電鉄本社食
堂内で開催。兼題―タクシ
ー・人材・おしつけ。

川柳塔社

華道関西末生流家元

籠島総甫

教室 西宮市北口町七ノ九
電話 六七六二二六
教室 尼崎市武庫庄浅堀
一五七一八
教室 尼崎市武庫庄三丁目
電話 (06) 四二二一四五〇
一五一三
武庫之荘文化会

電話 (06) 四三二一〇七三

・ 募 集 ・

十二月号発表 (10月15日締切)

川柳塔 (10句) 若本多久志 選
水煙抄 (10句) 川村好郎 選
愛染帖 (3句) 正本水客 選
課題吟 (各題5句以内)

「借金」 大路美幸 選
「忙わしい」 天正千梢 選
「キリスト」 谷垣史好 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

一月号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (10句) 若本多久志 選
水煙抄 (10句) 川村好郎 選
愛染帖 (3句) 正本水客 選
課題吟 (各題5句以内)

「初」 宮西弥生 選
「祝」 辻圭水 選
「旗」 浜畑胡蝶 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

一人の遅稿 大ぜい困る

定価 三百五十円 (送料29円)
半年分 二千二百五十円 (送料共)
一年分 四千二百円 (送料共)
昭和五十一年九月二十五日印刷
昭和五十一年十月一日発行

編集兼 中島蓬太郎
発行人 藤原童心社
印刷所 藤原童心社

郵便番号 542
大阪府南区饒谷中之町二〇番地

発行所 川柳塔社
電話大阪・二七一―三九八五番
振替口座大阪・三三三六八番

第30回堺市民川柳の会

日 時 昭和51年10月17日 (日) 12時

会 場 堺労働セツツルメント
(阪堺線大小路電停下車西100m
三井銀行うら)

挨拶 堺市文連協会長 高木幸太郎
兼 題 (選者アイウエオ順)

鉄砲線	青木三	碧太
脱線	阿部柳	松園
勝負	菊沢小	二郎
生きる	墨作	聡夢
行列	榎本	介
唇	中尾	藻

席 題 なし 各題3句出句出席者に限る

締 切 午後1時 堺まつりパレード見物 3時披露

会 費 500円 (記念品・作品集共)

呈 賞 各題秀句に市長賞ほか呈賞

当日、パレードその他多彩な催し物を皆様方と一緒に、『堺まつり』を見る清遊のひとつときを持ちたいと思います。

主催 堺市文化団体連絡協議会
堺川柳作家協会

夢が広がるシヨッピング
近鉄がお届けします



アベノ近鉄 ● TEL 621-1231



上本町近鉄 ● TEL 779-1231



奈良近鉄 ● TEL 33-1111

アベノ
上本町
奈良



近鉄

・ へん へん 草 ・

二賞きまる

★51年度の路郎賞と川柳塔賞が決定。今までの教訓川柳から一歩踏み出したことは、それなりによるこんでもよいのではないか。それにしても島根は強い。路郎賞が緑之助氏と正朗氏。川柳塔賞が王紫

▼ 葉子コーナー

▼女性には、二つのタイプがあつて、一つは好奇心、一つは依頼心のタイプと言われているそうです。

▼どうも私は後の方だと思います。あのタフな不二田様のお見舞に行き、恒子夫人の送迎を受けました。が方向音痴には困ります。

▼依頼心が不知不識のうちに方向音痴になったようです。それが年と共に大きくなるようです。

さんと今回の安達潮音氏だから、尼緑之助氏の指導よろしきを得てということになる。

恋人*が松江に行ってくれたため、山陰の方々と道の道も折け今日に至ったわけだが、島根の人たちは今なお他人とはおもえない。ヒマが出来たら小学校三年生になった。恋人*を連れて訪松したい。余談だが拙著を大量に引き受けてくださった友情は忘れられないものがある。

助っ人

★よく眠ったら治る病気？だが、ちようど愚妻が暑中休暇で遊びに来ていた。恋人*を岡山へ連れて行った夜からブッたおれた。丸二日間、水は飲んだがバシひと切れ食わずに寝ていた。三日や四日ぐらい食わなくても平気だが、気になるのは校正だった。体温は計かなかったが熱があつたらしいので活字が崩

めないのだ。娘が二人近くにゐるのだが電話もせず愚妻の帰りを待って、編集部の人にSOSの書留連達で原稿とゲラ刷りを送ったことである。どうしてもぼくがやらなければならぬ10ページほど残して。見舞いに来てくださった人が、まず智子さんへ電話してはくの家へ来る。そんなことで智子さん、君子さん、静香さん、あいささんが馳けつけてくださった。智子さんと君子さんには人手のない送本日には手伝ってもらったこともあつてそんなご縁からこんどぼくを助けてもらうようお願いした。編集部の仕事なんて、編集部だけより分らない裏方奉仕で申しわけないと思つてゐる。裏方率仕といえみんな役を持つてゐる人々はそれぞれにご苦労なことである。誰かが何かをやらぬと船は動かない。(不二田一三夫)

姉妹品大和錦印



柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社

大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

警察庁・警視庁
全国府県警察本部
大阪府警察本部
講道館・御指定

近鉄